

---

# 魔王と勇者は同級生

中田 中

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔王と勇者は同級生

### 【NZコード】

N2170

### 【作者名】

中田 中

### 【あらすじ】

優子には最近気になる人がいる。

ある日その人が告白されるシーンを直撃するが、その話のなかで彼の口から彼自身が好きな人の名前を聞きそうになる。

急に怖くなつた優子は、その名前を聞く前に屋上まで走つて逃げるが、気がつけば薄暗い森の中にいた。

## 第一話 気になる貴方（前書き）

- 1、誤字脱字がありましたら「」報告お願いします。
- 2、作者は「」のド素人です。
- 3、作者はびっくりするほどうたれ弱いです。取扱いには「」注意をお願いします。

## 第一話 気になる貴方

最近気になる人がいる。

とはいっても『好き』ではなくてまだ『気になる』の段階だが、このままいけば確実に私は彼を『好き』になる。と、自分では思つてる。いや、やっぱりもう好きになつてるのかもしれない。

短く切つた黒髪に、いつもしわのよつている眉間。少し太めの意志の強そうな眉。その下の一重瞼の鋭い目、キュッと固く結ばれた厚めの唇。筋の通つた高い鼻。男らしい輪郭に、がつしりとした首。熱い胸板に長い手足。

男くさい彼はよく見ると整つた顔をしているのに、せつかくの顔をいつも不機嫌そうにしていて、それに輪をかけて雰囲気が怖い。しかも無口。

だから他の女の子たちは彼の良さに気づいていないようだ。  
かくいう私もその中の一人だった。だけどあるきっかけが、私に彼とうの存在を意識させはじめた。

「何してるの？」

「ああ、高田か。」

高校三年の夏は、各部活の引退ラッシュだった。吹奏楽部だった私は、七月末の最後の発表会が終われば引退する。

引退する時期に差はあるが、夏休み前には監修実験モード全開。でもそれまでは最後の発表を大切なものとしたいから、放課後も遅くまで残って練習していた。

まだ学校側がクーラーをつけてくれないので、七月の初めからは窓を開けて風がはいつてくる廊下にてて練習していた。

その窓からいつも剣道場が見えた。  
私がいる本校舎の位置からは、柔道場と剣道場が連なつていて中がよく見える。

特に手前の剣道場は、重い鉄ドアを開けていれば奥まで見通せた。やっぱり道場もクーラーがついていないみたいで、開けっ放しにされていて色んな怒声が飛んでくる。

その中で圧倒的に強い人がいた。

今年初めて同じクラスになつた武藤君だ。

武道なんかやつたことのない私でも、彼は他とは一線を引いた強さを持つているのがわかつた。

まずなにより美しかった。

まっすぐにのばした背筋からコラコラと出ているかのように見えるオーラや雰囲気すべてが凛と澄んでいて綺麗だつた。

遠目からでも、彼の周りのピンと痛いくらいに張りつめた空気は感じられたし、彼の周りだけ時間が止まっているかのようだつた。なんでこの三年間気がつかなかつたんだらう。それがとても悔やま

れた。

「スゴイ……。」

「何がですか？」

いつも見ていたが、今日はうつかり声に出してしまったようだ。

「あつ、口に出した？・・・」二から剣道場見えるでしょ。そこで、同じクラスの武藤君が練習してるんだけどね、桁違いに凄いのよ。ホントに強い人の戦い方つてすごくきれいなのね。立ち方からして違う。」

「もしかしてあの人ですか？今打ち合ってる右から三番目のひと。」

「そう、那人。」

後輩が目を細め窓から身を乗り出して聞いてきた。

「・・・・・ほんとだ。すげく綺麗。」

後輩のその言い方と、どこか夢を見ているような視線に何故だか胸騒ぎがして不安になつた。

彼へ彼女の熱い視線を外させたくて、後輩を無理やり練習にもどした。

「ハイハイ、もう練習にもどるわよ！みんな散つた散つた！・・・・・十二小節目のアウフトクトから始めるよ。・・・1、2、3」

でもその一人の後輩の目が頭から離れなくて練習にあまり身が入ら

なかつた。今思い返すと、彼女の目に怯えていたのだと思つ。それにつと私もあんな目で、彼を見つめていたんだろう。

練習が終わつたあとすぐ、その子が私に話しかけてきた。

「先輩！聞きたいことがあるんですけど……。」

「何？」

なんだか嫌な予感がした。

「あの、先輩がさつき言つてた人つて武藤さんつて言つんですね。」

「

「ん、ああ武藤君。そうだけど……。それがどうかしたの？」

「いえ、ただ、武藤先輩つて彼女とかいるのかなあつて。先輩同じクラスなんですね。そういうの知つてますか？」

ああ、私の馬鹿。どうして彼女に彼の存在をさせちゃつたの。いかにも男が好きそうな『俺がそばにいて守つてやらなきゃダメなんだ』つておもわせるような、小さくてか弱くて可憐で。ゆるいカールのかかったフワフワの茶色の髪に黒目がちの大きな瞳に長いまつげ。白い肌にピンクの頬と唇、華奢な体。自分の魅力を理解していく、最大限に活かしてる。

そんな彼女を拒否できる男なんてそうそういない。

周りは気付かなくても私は彼女のしたたかな女の部分に気が付いていた。

女の敵になりそうな彼女が今までめ事を起こさなかつたのは、彼女がうまいことふるまつてきたからだろう。その陰で何人の男女が

泣かされてきただろ？。

部活が一緒にただの後輩が、一瞬にして『女』といつ生き物になつたことを確信した。

「ああ、知らないわね。でもいてもいなくとも、もひ受験だしきつと恋愛ぢにじやないわよ。」

必死に言い繕う自分になんとか笑いそうになつた。なんでこんなに必死なんだつて。

「・・・そうですか。ありがとうございました。」

部活の休憩中、外に出て暇をつぶしていくと、足は勝手に剣道場へ向かっていた。

しかもちよづ武藤君が道場からでて裏に向かうのがみえた。  
思わずつけていくと、道場の裏にある水道の水を頭にかけている武藤君がいた。

「何してるの？」

水を首にあてて体温下げているのはわかつたが、教室では話かけにくかつたので何か話すきっかけが欲しかつた。

「ああ、高田か。」

彼がびつくりしたように言つた。かといつても表情はほとんどかわらず、目を少し見開いただけだが。

それよりも、水に濡れた彼を近くで見て、彼に名前を呼ばれ、かれの視線に射抜かれ、心臓が止まるかと思つた。  
背中にゾクゾクとした悪寒がはしり、いやに興奮している自分がいた。

高揚感というやつだろ？

「まだ学校クーラーついてないだる。だから防具着てると熱がこもるんだ。倒れないためにこまめに体温下げる必要があるんだけど、そのために首に水かけてんだ。高田は？」

「・・・・・・・・・・・・

「・・・・・・・・・・・・高田？」

「ああ」とめん。武藤君がこんなにしゃべってるの初めてみたもんだから。

そういうと武藤君はハツとしたような表情をして、両手で顔をおさえズルズルとその場にしゃがみこんでしまつた。じょうなしか耳が

赤い。

でも私が言つたことは確かで、彼は仲の良い友達と一緒にでも、「ああ。」とか「いや。」とか、多くて一文話す程度なのだ。

「……武藤君！大丈夫？どうしたの？」

いきなりしゃがみこんだ武藤君にびっくりして駆け寄るが、武藤君は「いや、いい。大丈夫だから心配するな。」といつこ顔をこぢらこむけた。

「座れよ。中腰疲れるだろ。」

田で自分の隣を指し示す武藤君の言葉に従い、それから隣に腰をおろす。

彼との距離30センチ。

どうしよう私、心臓破裂して死んじゃつたら。

「私は部活の休憩中。外で暇つぶしてたら武藤君が水かぶつてるのがみえたから……。」

「高田は吹奏楽だったよな。トランペッタだろ。」

「……よく知ってるね。」

彼が私のことを少しでも知つてくれるのはとても嬉しかった。

「あ、ああ。まあな。ほり、あの、最近よく廊下で練習してるだろ。それでだよ。」

「確かに。ここからあそこ見えるもんね。私の所からもこっちよく見えたよ。私、武道とかよくわからないけど、武藤君がすっごく強いのは遠田からでもわかつたよ。」

「あ、有難う。俺も、ここまでお前の吹いてる音楽聞こえてきたけどさ、その・・・上手いと思つよ。俺みたいな素人がいうのもあれだけどさ。」

「クスッ、何この褒めあい。なんか恥ずかしいよ。フフッ。」

それから武藤君と私は、武藤君の後輩と私の後輩が探しに来るまでずっと話をした。

部活の事、受験について、将来の夢、家族のこと、好きなもの嫌いなもの。それに彼のいろんな面を見れたのがうれしかった。楽しい時間はあつという間だった。

「高田……」

部活に戻ろうと歩きだしたとき、武藤君に後ろから呼び止められた。

「？・・何？」「

「あ～あの、や。お前さえよければその、なんだ、これから部活の休み時間いろいろ話さないか？あつ、嫌だつたら別に全然かまわないんだ。ただいろいろ相談していれば凄くいいんじゃないかなと思つて」「いいよ。」そうだよな。嫌だよな・・・つて、え？」

「だから、いいよって。時間もあるし。・・・私も話たいし。」

「ホントにー？」

「ホントに。こんなことなんかで嘘いわないよ。」

それから彼とは、ほぼ毎日決まった時間に道場裏に集まって2、30分話して解散するといつつきあいになつた。私と彼だけの秘密の時間。

彼と話している間はとても落ち着いたし、しゃべらない間があつても、とても心地よい無言の空間だつた。

教室では特に話さなかつたが、ふとした瞬間に目があつたりすると優しく笑いかけてくれた。

それからは放課後が、部活が、部活の休憩時間がとても待ちどじく感じられた。

放課後部活に行こうとするとき、あの後輩が教室の外にいた。まさかと思つた。  
だれか探しているようだ。

「あのー武藤先輩。今時間とれますか?」

「・・・少しならとれる。で、それが何？」

「いえ、あの・・・」では少し言つていいとなんで、場所を移しませんか？すぐすみますんで。」

行かないで

「わかった。」

そつぱりと、武藤君は彼女についていつてしまつた。  
私に引き留める権利なんてないけど、行かせたくなかつた。

気がついたら、彼らにばれないように後ろから追いかけていた。

西階段の踊り場にたどり着くと、彼女はそこで足を止めた。

私は一人にみつからないように、上の階の壁に張り付いて耳をすませた。

「突然すいません。・・・・・・あの、私、武藤先輩が好きです！私と付き合つてくれませんか！！」

「…………めん。」

聞こえないように大きく息をはいた。いつの間にか呼吸する」とさえ忘れていたようだ。

「な、なんですか！……私じゃダメですか…先輩のタイプの女の子になります！」

「・・・好きな・・・好きなごがいるんだ。だから君の気持には応えられない。」

「・・・それって・・・誰なのか教えてもらひませんか。」

「・・・それは・・・」

武藤君の答えを聞く前に、駆け出していた。

走つて走つて走り続けて、過呼吸になるんじゃないかと思ひほゞ走り続けて、屋上に飛び込んだ。

屋上に飛び込んだつもりだったのに気がついたら薄暗い森の中だった。

「…………めん。」



## 第一話 気になる貴方（後書き）

別の小説書いてる途中なのに、これも書こっちゃいました。  
更新はまつたりとお待ちください。

## 第一話 名前を呼んで

「う・・そ・・・何これ。ビリョウ。」

荒い息を整えながらあたりを見回す。

さっきのことが一気に吹き飛ぶようなでござりとにかく飛び入りフリーズしてしまった。

「あつー。そうだ、携帯・・・・・・ダメ、圏外だ。」

とにかく、なぜこうなったのかとかを考えるのはあとだ。  
今はこの森を出て、人に会わなければならない。話はそれから。  
皮鞄とサブバックを抱えなおすと適当にまっすぐ歩いて行く。  
ここがどこなのか地理的感覚もないし、方位磁石もない。それにここで助けをまつても、きっと誰もこないだろ？。それなら自分から行動に移すしかない。

孤独で泣きそうになる自分を叱咤して歩き続ける。

森の中は、屋久島の千年杉のような木々が空に伸び、あまり地面まで光が届かない。

木と表現しているが、今まで見たことがないものだ。幹と呼べる部分も全部緑なのだ。しかも全部同じ種類。  
もしかしたら、自分が物凄くちっちゃくなつたんじゃないだろうかと思つ。

でも葉っぱの間から木漏れ日がキラキラしていて、それは綺麗だ。  
動物にも全く会わない。逆になにか生き物がいてくれた方が落ち着くのに。

腕時計を見ると、五時間近くたっていることに気づいた。

道理で足が痛いはずだ。歩くたびに足の裏が刺されたように痛む。

「足がだるいな。でも、ここで休んだら立ち上がる気がしないよ。」

でも水分補給のために、水筒のお茶を。当分補給のために飴を一つ  
なめながら歩くことにした。

五時間もたてば、だんだん暗くなつてきていた。

携帯のライトを使えば見やすいのかもしれないが、なるべく携帯の  
充電は無駄にしたくない。

どこまでいつても同じ風景。体もまた悲鳴をあげだす。

ようようと大きな木の根元に座り込む。

「・・・・・無謀だつたかも。」

無駄に動いたことに後悔する。

この森が、どんなに広いのかわからぬいくせに動いてしまった。

「ハア～、これからどうしよう。人間って、ほんとに悲しい時、苦  
しい時とかつて泣けないんだな。泣く暇さえ与えられない。とりあ  
えず、気分転換に荷物整理でもするか。でも荷物持つてたのはラッ  
キーかな。」

独り言を言いながら鞄を漁る。

「えっと、皮鞄の中は数学と現社と世界史日本史の教科書にノート。  
英単語帳に筆箱にメモ帳、電子辞書。サブバックの中はつと、お弁  
当箱に水筒入つたお茶と昼休み買ったペットボトルの炭酸ジュース。  
化粧ポーチに鏡。タオルハンカチ。携帯に定期に折り畳み傘。家と  
自転車の鍵。・・・・・後は大量の食べかけたお菓子か。飴に、

ポテチ一袋に板チョコ三枚にソフトキャンディー一つ。他にもあるな。持つてきすぎて重かつたけどこれもラッシュキーね。」

夏用のセーラー服にカーティゲンだけの姿だと少し寒い。スポーツタオルを肩にかけ、皮鞄を枕に眠ることにする。

疲れのためか、家族や友達、武藤君のことを考える暇もなく眠りにつけた。

目が覚めても風景は昨日のままだった。

「・・・ホントやだ。」

筋肉痛とだるさでボロボロの体を引きずりながら起き出す。

そんなことを八回くらい繰り返した。

お菓子も、飲み物もとっくに底をついていた。

「・・・・・ハア・・・・・・お風呂・・入りたい・・・・・

朦朧とした意識の中であつ思想た。

それから先は覚えてない。

気がついたら変な化け物みたいな奴らに囲まれていた。

「いやああああああああ-----」

疲れた体に鞭を打つて走ろうとするが、足がガクガクして逃げられない。

ファンタジーの世界から抜け出てきたような奴らに迫られ、とらえられる。

何かしゃべっているがわからない。

私終わった。

その中の全身緑色の肌をした大男?のような人に担がれ恐竜のよくな生き物に乗せられる。

暴れまくるが全く歯が立たない。

「いやいやいやああ-----放してよ-----」

恐竜が走り出すと揺れがひびくて、暴れたままだと男の腕から落ちそつになる。

大人しくするしかない。

唇をぎゅっとかみしめ恐怖に耐えた。ひとりぼっちの孤独も嫌だつたが、これもかなり嫌だ。

縁男の顔を見ていると、それに気づいたのか男が不思議そうな顔をしてきた。

「・・・これから私をどうするつもり?」

男に聞いてみると、返ってきた言葉はまったく聞いたことのないものだ。

特殊メイクか何かだと思っていたが、どうやらもとから縁の肌らしい。他人?たちも少しだけ見えたが、一足歩行の狼のような奴が中世やファンタジーの住人のような服をきていたりする。

「これは地球でさえないのでかもしれない。

そう思ふと、自分のおかれただ状況と森の中一人耐えた恐怖を思い出しぶつこに来てから初めて泣いた。

「うーーヒック、ヒック・・・お母さんお父さん助けに来てよおーヒック・・うー、武藤君こわいよおー私一人ぼっちだよおヒックヒックうー・・・」

急に泣き出した私にびっくりしたのか、縁の男は私の後ろで慌てているようだ。

それに気づいた他な奴らが、恐竜を止めギャーギャーしゃべり始め

た。

「どうやら縁の男に對して怒っているようだ。

「へ、何?仲間割れ?」

後ろを振り返ると、オロオロとして慌てている縁男と曰があつた。すると男はそろそろと私の頭に手を伸ばして、いーこーことナガテしてきたのだ。

びっくりしそぎてポカーンとしてしまつた。  
意外過ぎて涙も引っ込んだ。

この人たち、見かけはモンスターみたいだけどほんとはやさしいんじやないかと思つた。

私を助けてくれたんじゃないかつて。

「私の名前は高田優子。わかる? 優子。た・か・だ・ゆ・う・こ」

自分を指さして言ひ。

「タカ・・タユ・・・・コ」

「わうー・わうー・コー コ。言つてみて。コー コ。」

「コー コ」

「さうー! あなたの名前は?」

今度は縁男を指さして言ひ。

「ラグ。 ラーグ。 ラグ」

彼は自分を指さして「ラグ」といった。

「らぐ？」

「ラグ」

「ラグ」

私がそう言つと彼は嬉しそうに笑つた。

私もつられて笑つた。

自分名前を呼ばれるのがこんなに嬉しいことだとは思わなかつた。

嬉しすぎて、また涙が出てきた。

泣いた私にまたオロオロしだすラグは私が泣いたせいでまた周りから責められた。

それが面白くて、泣きながら笑つた。

## 第一話 名前を呼んで（後書き）

あけましておめでとー！ ジャニーズますーー！

## 第三話 お城にて

恐竜に揺られ森を抜けると、一面人工的な畠が広がってきた。その向こうに大きな西洋系の城がある。

城は大きな城壁にかこまれていて、石の関係だろうか城は全体的に黒っぽい。

恐らく、城壁内は城下町が広がっているのだろう。

「城に向かつているのね。」

しばらく恐竜に揺られていると巨大な門の前にいた。門の前には猿に似た動物の顔の人と、爬虫類のような顔の人が甲冑をきて警備をしていた。

私たちが目の前に来ると、片ひざを立てて挨拶した。これは敬礼のようなものなんだろう。

そのうちのサル顔の人にラグが何か板のようなものを見せると、どうぞというように門の横にある小さい扉から通してくれた。中はやっぱり町になつていておどき話のモンスターたちが大集合という感じだった。

でもやつてていることは人間と何ら変わりない。子供は元気に走り回り、大人たちも忙しそうに働いている。

そう言えば、外の畠でもたくさんの人たちが働いていた。

街並みも西洋風だ。でも素材が黒いものが多く使われているためと町の人たちの姿とで、かなり怖いというかダークな雰囲気だ。

しばらく進むと町の中心地に来たのだろう。ものすごくにぎやかるのが遠目でもわかる。

市場を開いてるようだ。中東あたりのバザールに似ている。

売ってるものは様々だが、正直食べ物は結構グロテスクな見た目を

していてギョッとした。それに自分たちの顔に似ているのに、ここの人たちよく食べれるな。

ここで暮らすならあれを食べなくちゃいけないに、大丈夫か私。

市場を恐竜に乗つたまま突き抜けるのはかなり邪魔になっている。  
それでも時間をゆっくりかけて市場を出る。

市場を抜けると少し閑静な、高級感がでている町並みに入る。  
そこを通ると、城門が張り巡らされた一帯に出る。城下町を囲う門  
と、城を囲う門の一重構造のようだ。

門の周りは水が張られたお堀がある。そこに一本の橋がかかっており、城壁の門へと続いている。

そこにまた、一人の警備兵？が立っている。

その二人の前までつくと、さつきの門でもやつたようにラグが板の  
ようなものを見せ、それを見た一人は片ひざをたてひざまづく。  
もしかしてラグ達って偉い？

城内はゴシック的な雰囲気を醸し出している。

魔王城みたい。

そのままあれよあれよというままで、ある一室につれてこられた。  
執務室のようなところだ。  
中には何人かが働いていたが、私たちが中に入るとヤギ頭の人気が近  
づいてきた。

ラグとヤギ頭何か話している。そのあとヤギ頭は私を上から下まで  
ジーッと見ると、ついてこいというように顎をクイッとしゃくる。  
不安になつてラグを見上げるが、大丈夫だといつよつに微笑んで背  
中をポンッとかるく押された。

ラグが何か手配してくれたのなら心配はないんだろう。  
決心してコクンとうなづくとヤギ頭についてゆく。

廊下を進んでいくと、また部屋に連れて行かれた。部屋にはお揃いのメイド服のようなユニフォームに身を包んだ女性たちが大勢いた。何人かは女性かどうかわからなかつたけど・・・。  
ヤギさんが中に入るとすぐに、まつ白い肌に真っ赤な髪以外は普通に人間にみえるお色気美人さんがやつてきた。

また一人が話しあじめ、美人さんが私の周りをグルッと見て回る。少し緊張してピンと背筋を伸ばすと、美人さんはほほ笑みヤギさんにまた話し始めた。

話が終わるとヤギさんはでいき、美人さんは私に向き直ると話し始めた。だけど言葉はわからないから困った顔をしていると、美人さんは少し思案した後自分を指さしてギルバーダといった。だけどギルとも言っているので、そう呼べということだろう。私も自分を指さしてゴーゴーだと伝えた。

美人さんにその女性たちと同じ服を着させられた。  
これはもしかしなくても、この城でメイドさん的なことをしろということなのだろうか。

着替えた後はまた移動で、城内を抜けて宿舎のようなところにきた。ギルが扉をノックすると、ワニのような頭をした人が出てきた。私がびっくりして固まつたのを、不思議そうな顔をして見られた。

中に入れられると、十畳ほどの広さの部屋に一段ベットが二つ、その奥に小さな机とイスが二つ。そして大きなタンスが壁にズラツと並んでいた。

すでに三人住んでいるらしく、さつきのワニ顔の子と猫のような耳の付いたかわいい女の子、ラグのような縁の肌を持った女の子の三

人だ。みんな私とおそろいの服を着ている。

「どうやらギルが三人に自分を紹介しているようだ。ところどころ  
ー」と自分の名前が聞こえる。

三人は私に向かつてそれぞれ自己紹介をはじめた。あらかじめギルから私が言葉をわからないことを聞かされていたのか、自分を指さして短く自分の名前だけを告げてきた。

上からガルサ、ルーベル、シェイラーというらしい。  
私も通じないとわかつていながらも日本語であいさつすることにした。

「はじめまして、高田優子と申します。」迷惑をお掛けすると思いまがよろしくお願ひします。」

そういつてぺこりと頭を下げる。

そうすると彼女たちは、二コ一コ笑い私に色々話しかけてきた。  
どうやら私は受け入れてもらえたらしい。

## 第四話 アーシャルバー代理

「ユーロ……終わった？お昼御飯にしましょ。」

「もつそんな時間？あとちょっとで終わるから待って。」

私がこの世界にきて、ほぼ一年近くたった。ここはヴィーリングガルート国<sup>1</sup>の首都クロウイグ。

言葉は、相撲部屋の力士が完璧な日本語を話すのと同じように、必要に迫られることと、その言語にどっぷりつかることによって日常生活に困らない程度話せるようになった。

ホームシックで毎晩泣いてた私をやさしく慰めてくれたのは相部屋の三人だった。事あるごとにものを指さして固有名詞を聞いたりする私に、三人は根気強く付き合つて文字も教えてくれた。こちらに持ってきた勉強のノートを途中から単語と文法、こことの知識を書きとめるためのモノにかえた。

言葉がわかるようになると、色んなことがわかるようになる。そしてわかつたことは、ここでの私の仕事は給仕担当のメイドだということ。この世界は意外にも民主制で、トップのアーシャルバー（大統領や首相のようなもの）は良い政治をしていれば選ばれてから死ぬまで王様のような暮らしをおくれるが、国民が許せないほどの政治的失敗または独裁をした場合は国民投票や意見交換により処罰が下される。ほかの役職も投票によって決められる。

因みに、ラグは神武官長補佐という役職で結構偉い。神武官とは、この国の神様であるバルーダを祭る神官であり神殿直属の兵士のことだ。

ラグに何故私を助けたのか聞くと、クリンの森の入口で遊んでいた子供が誰か倒れていったということで、地方神殿を視察した帰りのラ

グたちに知らせたらしい。そこで倒れてたのが私で、見たことない民族だつたけど、ボロボロで可哀そだということで連れて帰つてくれたらしい。

またギルはメイド長だ。しかもギルは日本の歴で数えると、250才といつづわものだ。

あんなに美人なのに。

ここに食べ物にも苦労した。味は大丈夫なのだが、いかせん見た目が怖い。体も慣れなくて、お腹を壊したりもした。

唯一のすくいは水が地球と変わらないこと。

でも重力も少し地球より弱いらしく、私はここでは力持ちだ。場所によつては、物凄く酸素が多くて呼吸しやすいところもあるが、少ないところもありそこでは窒息死に気をつけなければならぬ。

「ねえユーロ聞いた? ヘイロネア国がまたなんかやらかしてきそうだつて噂よ。」

「ヘイロネアが? 確か昔もあそこはいろいろ仕掛けてきたのよね。」

「そりなの!! 私たちを卑しい化けものだつて!! 悪の国だとかいつつも攻め込んでくるの。自分たちは正義で美しく賢いのだとか何とか言つちゃうのよ。笑えるわ。姿かたちの違う私たちを排斥して領土を広げたいだけなのよ!!」

食堂でルーベルとビスルというパンに似たものを食べながら話す。ルーベルは興奮しているのか猫に似た尻尾をシャーっとけば立たせている。・・・可愛い。モテるはずだ。灰色の髪が魅力的だわ。

「聞いてるの? ゴーゴー!」

「聞いてるよ。」

ヘイロネアという国の人にはあつたことはないが、私と似ているらしい。また、自分たちと姿かたちの違う人々を差別しており、自分たちが至高の存在であると信じて疑わないらしい。

「戦争になるのかしら? 私の国は戦争のない国だつたから不安だわ。」

「ん~過去に何度も戦つてるからね。しかも勝敗は五分五分。私はここでゆつくり過ごしてみたいだけなのに、彼らの国の邪魔もするつもりもないのになんで毎回毎回ちよっかい出すかしら。」

「もしそうなつたら俺たちが守つてやるからだ丈夫だ。安心しな。」

訓練が終わつた豚っぽい頭の兵士さんが話に割り込んできた。

「じゃー任せたわよ兵隊さん。」

「ルーベルちゃんに言われたんじや頑張るしかないつてもんよ。それより、美人と可愛い子が二人並ぶと壮观だねえ! !」

「おだてても何も出ないわよ。でも褒めてくれて有難う。」

私がそのまま兵隊を連れて去つて行つた。黒豚系のひとだったから顔の赤さとかはわからなかつたけど、あれは絶対照れてた。

「もひー・ゴー・コはホント罪作りね。」

「・・・ねえ、ルー。さつきの人の言葉の中でわからない単語があつたんだけど。ほめてくれてたのは雰囲氣でわかつたわ。」

「何がわからなかつた?」

「サグ、サグラーベ? だつたかな。ええつとそんな感じの・・・」

「ああ! サグリーブね。サグリーブ。意味はね・・・ん~、凄い景色みたいな時に使うかな。」

「サ・グ・リ―・ブ。凄い景色などを見たときに使用つと。よし! メモつた。ありがとね。」

ポケットからメモ用紙を出して、ルーベルが教えてくれた意味を書きとる。こうしないと忘れてしまうからだ。特に名詞ならわかりやすいが、形容詞や助詞副詞などはなんと言つていいのか理解するのがかなり難しい。

食堂で遅めの食事をすますと、午後の仕事に戻る。給仕といつても様々な雑用をしないといけないのだ。

毎日一生懸命働いて、仲間とおしゃべりして泥のように眠る日々を繰り返した。

最近では、家族の顔さえ思い出せそうにない。

忘れないのに忘れてしまう。それが何より怖かった。夜の眠る前や一人になると、向こうの世界のことを思い返してしまつので、わざと必死に働いて体を疲れさせて眠りについた。

神殿の鐘が物凄い勢いで鳴り続ける。

ヘイロニア軍が、後一日ほどでこひらこひらしげ。城の中ではみんな慌ただしく走り回つてゐる。

「どうこうことだ!! 城に向かつてゐるだと!! しかもあと一日ほどで着くだなんて!!

牛頭のザーナ将軍が焦つたように机を叩く。会議室の中は重い空氣に包まれていた。

「奴ら、こちらの食料が尽きるまで待つつもりですよ。長期戦のために、しこたま食料と武器を持ってきてゐるらしいとの報告です。

「アーシャルバー、『決断を。』

みんなの視線が年老いた犬顔のアーシャルバーへと向かう。彼は国民にやさしい政治を行うとして選ばれたが、戦ではその優しさは仇となる。

「…………今まで幾度となくヘイロネアとは剣を交えてきた。多くの者たちを失った。家族、友人と愛する者たちをな。わたしはもう誰も失いたくないのだ。だから戦は避けたい。それに兵が足らん。」

「ではいかがなさるおつもりで……。」

「城に籠り、被害を最小限におさえよ。城壁がある程度は守ってくれよ。」

「ですが、それでは長い時間もちません。奴らは長期戦のつもりですよ。我々には不利です。」

私は会議室で、幹部たちの話を聞きながら水を給仕しまわった。こういう場合つて歴史の知識とか役に立たないかしら。何かあったかな。

「あのあー、少しよろしこでどうか?」

「なんだ!!今は勝つか負けるか、生きるか死ぬかがかかってるんだぞ!!」

「城に籠ってしまうということは、城を囲まれるということですね。そう言つ場合は、ええと防御設備、備蓄物資とか?をして、

士気が高く適切な数の兵を有すれば、大軍をもつてしても陥落されるのは非常に困難だ。といふのを聞いたことがあります。」

「そんなことはわかつてゐる……給仕の使用人である戦の素人が口に出しするな……！」

「今まで……えつとなんて言つんだろ。お城に籠つて戦うことなんですかぞ……。」

「ええい……そんな言葉はない……それよつせつきからお前はなんだのだ！出でゆけ！！」

どうやら籠城という概念はまだないらしい。しかも将軍に思いつきり怒鳴られる。

「お待ちを、將軍。話を聞くよりよろしくでしよう。……お前、何か策でもあると？」

宰相に近い役割の、ムーバミンさんがはなしかけてくる。

「そういうのを私の国では『籠城』つていうんですけど、今までやの経験は？」

「我が國建国の歴史の中では一度もない。じこまで奴らが攻めてくるのは初めてだ。今まで別の場所で戦つてきたが、それがどうした。」

「少しお待ちください……。」

そう言つと一礼して、廊下へ飛び出る。向かうのは自分の部屋。

確かに日本史のノートに、時と場所と場合に応じた色々な戦法を書いていたはず。その中に籠城についても載つてたと思う。過去の戦争内容や、執政についても細かく書いた記憶がある。

日本史の先生が戦法オタクで授業に関係ないが教えていて、『軍事史好き仲間とウイキペディアにも書き込んだりしているらしい。』てか、の人たちがほとんど書き込んでるんじゃないだろうか。一回見てみたけど、授業で喋つてたこととおんなじこと書いてたし……。自分としても面白かったのでノートを作つていたメモ欄に、全部書き込んでいたのだ。それがこんな所で役立とうとは思わなかつたが。

「ハアハアハア・・・日本史ノート。机の中に・・・あつた！！！でもこの世界で通用するのかしら。」

とにかくやってみなければわからない。ノートの中身を確認して、籠城について書いたページを探す。

籠城の文字を見つけると、また会議室へと走り出す。

「ハアハアハアハア・・・遅そく・・・なつて・・・すみま・・・ハア・・せ・・ん。」

会議室につくと、説明のため荒い息を整える。給仕の友達が、水をコップに注いでくれた。

それにお礼をいって、渴いた喉を潤した。

「で策はなんだ？ そんなものあるのか？」  
将軍が息を荒げながら聞いてくる。

「あの、その、籠城戦を行う場合は・・・えっと・・・まず、自分たちの状況を知るために得になること損になることを説明します。

籠城して私たちあるメリットは・・・

「待て、『めりつ』とはなんだ?」

宰相が不思議な顔で聞いてくる。  
私は会議室の円形テーブルに近づくと大きめの声でノートの内容を翻訳しながら話した。

「メリットとは得することという意味です。話の続きですが、我々の籠城による徳は、立てこもる城の構造や兵の士氣にもありますが、守る側・・・守備側ですね。守備側は攻撃側の数分の一の兵力でも拮抗できるため、極端な兵力差がある場合や支城などで相手側を止めする必要がある場合には有効だということです。また、長期戦になつた場合には多勢である攻撃側の兵站確保が困難となり、撤退、事実上の敗戦ですね。それに追い込まれる場合もあります。」

「大体予測できる程度だな。」

「最後まで一応聞いてください将軍。」

「な、何だと!!私は將軍だぞ!仮にも軍を預かっている私に向つてなんてことを!!」

この人頑固すぎる。頭が固いというのか。話ぐらい最後まで大人しく聞いてくれ。

「ハア~。・・・続けても?」

宰相に伺うとウンとうなずいて、「気にせず続けなさい。」と言わされた。

将軍がまだ何か言っているが、この際無視だ。

「我々にとつて損なことは、ええっと・・・数ヶ月～数年にわたる長期間の兵糧攻めを受けた場合には物資の・・・足りなくなること・・・ん～欠乏だ！物資の欠乏や・・・飢え？あつ！飢餓か・・・飢餓に陥り、城主の自決による開城などの結末を迎える場合も過去の戦では多かったそうです。こうした場合を想定して、城には深井戸や食糧となる樹木を植え、籠城を意識した構造を探っているものも珍しくなかつた、ともありますね。そういうものは・・・ありますよな。籠城初めてだし。」

「いくつか果実や木の実が生る植物などは植えられているが・・・それだけでは城下町の民たちを城にかくまつたら足りんだろうな。」

宰相が困つたように言つ。

「それが全てではありません、宰相様。氣を落とさずに。続きはつと・・・また、攻撃側によつて包囲されている関係上、包囲の外との連絡が取り難いため、援軍と呼応しての反撃は受動的にならざるを得ません。しかも、攻撃側が守備側を包囲してなお侵攻に必要な充分な兵力を残していた場合、籠城する戦力は遊兵と化す恐れがあります。・・・我が国に、同盟関係や友好関係にある国は？」

「何力国があるにはあるが、他国に戦争に関わると自国の危機にもつながる可能性があるからなの。・・・はたして援軍として来てくれるだろうか。」

アーシャルバーがうつむき加減でつぶやく。他の役職の幹部たちもそれにつられるように頭をうつ向かせる。

「やつてみないとわかりません。とにかく使者を派遣しましょう。援軍がだめなら物資の支援をしてくれるようになに頼みましょ。秘密のトンネルを掘ってそこから運び込んで耐えましょ。」

「こんな小娘の言つことをお聞きなさるおつもりですかアーシャルバーー！立て籠もるなど、生易しい気持ちはいけません…！」

将軍がやつてゐるに続いて、他の幹部たちもやつだやつだと続く。  
「一つの国とこつても広いのだぞ。我々の考えが足らなかつたミスで、まだ召集はしておらんから各村や町に連絡を回して男たちを集めるだけで最低1週間はかかるぞ。後一日で敵軍がこちらに付くといつのに無理なはなしだ。首都の男たちだけでは対抗するのに少なあがいる。」

宰相が悔しそうに言つと、誰もが口を閉じた。

「籠るしかないと？」

「の、よつだな。・・・娘、どうしたらよいのだ。」

「はー。まずはなにより準備からです。食料、水、武器、消耗品その他の必需品を十分備蓄する。それから・・・城壁など城の修繕、強化する。そのための材料確保も。その材料が確保できたら、周辺の木々などを伐採し、敵軍に対して破城槌や燃料に使える木材などの確保を困難にさせる。防御するのに必要、十分な守備兵を集め。これはどうしようもないのですね。主君や友好国に援軍を要請する。これも使者の方に頑張っていただきましょ。う。」

「わかった。手配させよ。」

アーシャルバーが大きくうなづいてくれた。

「…………具体的にはどうこう戦い方をすればいい？」

意外にも将軍が話しかけてきた。

「その前に一つ。ヘイロネアは過去に他国対して城まで攻めに来たことは？」

「いや、普通戦というのは宣戦布告をして、どこの国にも属しないような場所で行う。この世界でこんな戦は初めてだ。……奴ら、我々を滅ぼすために当たり前の戦争の礼儀さへ無視したようだ。我々が奴らに何をしたというのか、姿形が違うだけだというのに……」

将軍は忌々しげにつぶやくとまた机をたたいた。

「それなら前もって準備していたのでしょうか。私の国とは違う攻め方で来るかもしませんが、彼らも城をおとすのは初めてでしょう。慣れていないのでこちらにも勝機はあります。攻撃には……ええと火をつけた・・こう細い棒の先に切れるものをつけて、糸の付いた反り返った棒の力でビューンと飛ばす兵器の名前……」

専門用語は名前がわからなくて困る。

「矢のことか？糸の付いた棒は弓だ。」

「それをそう言つのですか。その矢に火をつけたものをうたれれば

何とか翻訳し終わる。いつぱいいつぱいだったから、ちゃんと伝わるだろうか心配だ。

「ティラスラ書記官。ちゃんと書きとめたか?」

「はい、アーシャルバー。」

「いわ。よんじ。・・・ヒルで、娘。そなた名はなんと申す。」

アーシャルバーに名前を聞かれ、この国の最大の敬意の示し方である、片ひざをたてて名乗る。

「アーシャルバー、私の名前はユーロ。ユーロ・タカダと申します。」

「そうか、ユーロというのか。お前は異国人だつたな。そのような知識はどこで？」

「我らが世界には、子どもたちは学ぶ権利と義務がございます。そのため、学問など様々なことを同じ年頃の者たちと共に学ぶところがございます。こちらで言う、グラダスのようなものです。全国人民の子供たちがその教育機関に入る必要があるということでグラダスとは違いますが。そこで学びました。」

「……なるほど。お前には学があるのだな……お前は私などより知識もあり、先ほどのやり取りからどうやら指導力も決断力もあるようだな……」

そういうとアーシャルバーは黙り込んで思案しばじめた。そして会議室にいるみんなに、これは決定事項だとでも言つよう起きつぱりと宣言した。

「ユーロ・タカダに、私アーシャルバーは全権限をゆだねることにする！この戦の間は、ユーロの命は絶対だ。私の命だと思え！……ユーロよ、お前をアーシャルバー代理とする。心して臨め。」

会議室がいつせいにシーンとなると、次々と反対意見が飛び交いだ

した。

私自身もびっくりしそぎて動けなかつた。

「アーシャルバー！何を醉狂なことを…自分が何を言つてゐるのかわかつておいでですか？」

「ああ、もちろんわかつてゐるとも。だがな、皆よく考えてみてくれ。我らのように、このような戦の知識がないものが指揮をとるよりも、ゴーレーのように知識があるものが指揮をとつた方がよいに決まつておろう？あのものは先ほど的確な判断を下し、我らの持たぬ知識をも披露した。これほどの適任はあるまい…」

「ですが…・・・そうです…」このものからあらかじめ戦についての知識を得ればよいのです。」「

「それは戦のあとじや。戦とは生き物だ。どんなことがきっかけで戦況がかわるかわからん。そんな時に、このものから得た知識をまとめた紙とにらめっこするつもりか？瞬時の判断が大切なのに？」

アーシャルバーの「」の一言で、みんな黙つてしまつた。反論の余地がないのだ。

アーシャルバーはぐるりと会議室のメンバーの顔を見回しながら言った。

「よし、これで決まりだな。」

「いえいえいえいえ…！…！…ちょっと待つて下さい…勝手に決めないでください…！…私は無理です…！」

「もう決まったことだ。」この国を守れるのにはお前の知識が必要だ。

私も、もちろんここにいる者たちもお前を支える。何も一人で何でもかんでも考えて決めろといつてはいるわけではない。お前の力を借りたいだけだ。」

「ここでなんとか拒否しないと、ヒトの命が私の一言で左右されてしまう。そんなこと、一年前まで高校生だった私には無理だ。

「ですが、私には無理です。人の上に立つ仕事もほとんど体験したこと�이ありませんし……なにより、人の生き死に実際に関わったことのない私は恐ろしくて仕方ないのです。自分の判断で何人殺すかわからない……私にとって戦争は紙の上のお話なんです……」

「……確かに前の言つとおりだな……私個人としてはお前のような娘にこのようにキツイ判断をさせる仕事に就かせるのは絶対に反対だ。だが私はヴィーリンガルート国アーシャルバーだ。お前個人よりも多くの国民のためにつかう。これは命令だユーロよ。アーシャルバー代理となれ。」

「…………はい。ご命令承ります。」

国のトップにお願いではなく命令されてそれを実行しなければ反逆となると私はこの国で生きていけなくなる。

この命令を受けるしか私にはなかつたのである。

## 第五話 使者

「どうこうことだ！！！今までのヘイロネア兵の剣術は我々と同じようなものだつたのに！！今まで見たことのない動きをしているぞ……どうするのだ娘！！！」

殺しなんて嫌だと甘ちょろい気持ちだと自分たちがやられてしまう。そんな光景を私は見ていた。戦況が見える比較的安全な部屋にいるが、遠目からでも一人一人の顔まではっきりと見える。血が飛び散つたりするようなグロテスクなものは本来平氣だから問題ないが、目前で敵味方関係なしに死んでいくのはショックだ。だけど私はアーシャルバー代理だ。この国の命運を任せている。敵にも大切な人たちがいるように、私たちにも大切なものがある。それを守らなければならない。

敵は殺す氣で来ているのに、戦争は嫌だなんて言つてられない。それ以前に、命の防衛本能が働く。

「黙れ将軍！！！苦境に入った時ほど冷静でなければ判断を誤る。・・あの動き、どこかで見たことがある。それに、私の国と違う攻め方もあると思っていましたが、私の知つている攻撃ばかりだわ。」

自分に言い聞かせるような口調で言い、頭を落ち着かせた。

「何！？ではどうするつもりだ！！！」

「その前に将軍、言葉を改めてもらいましょう。私はアーシャルバー代理。すなわちアーシャルバーと同等の権限を持っているのです。ということはどういうことかわかりますよね、将軍より立場は上です。」

「ハ、小娘！」ときが私になんて口を……」

「何度言わせるつもりですかザーナ将軍。口のきき方には気をつけなさい。・・・それに今はもめている場合ではありません。將軍、貴方ならわかるでしょう。將軍の貴方が代理の私を敬わずに、どうして兵がついてきましょか。貴方のおっしゃる通り、一給仕使用人ごときがアーシャルバー代理に急になつたからと書いて、私を信じ付いてくれる者は皆無に等しいでしょう。この戦時下、兵の心が割れることは負けを意味します。・・・わかつてくださいますよね。」

將軍の目を見て問いかける。

將軍はいわゆる単純明快な一直線攻撃型で、情にもろく、熱血野郎でちょっと頭が残念。だけど単純な分丸めこみやすい。つまりは扱いやすいということだ。だが兵の士氣を盛り上げたりするのが上手で、突撃の時などはあまりの恐ろしさに敵は逃げ出すこともあるといつほどの扇動能力を持っている。

そこをうまいこと利用すれば、何とか勝てるかもしれない。なにせこちらは圧倒的に不利なんだ。

因みにこの情報源は宰相さんだ。

「・・・お前はそんなことまで考えていたのか。・・・今までの」  
無礼を許してほしいゴー「殿。私にできることなら何でもしよう。  
何なりとじ命令を。」

感極まつたよつた将軍は言つと、私の前にひざまづいた。

ホントに単純すぎる。百万の布団騙されて買っても、アレは騙されたんじゃなくて欲しかったから買ったんだ。あいつは人をだませるような奴じゃないって、ちょっと優しくされただけで詐欺師をかば

うタイプだ。今時の日本じゃ絶滅危惧種だわ。

窓の外を覗きながら私は考えていた。こちらの世界は、兵士はたくさん訓練はするが剣技を追及するという概念はないらしく、試合などは唯の棒ふり合戦のような感じだ。力かスピード勝負で技術はそんなに高くない。お互い今までそうだったらしいが、ヘイロネア兵一人一人がとてつもなく強くなっているらしい。

先ほどから幾度となく城下町の中にはいられそうになつているが、準備のおかげで何とかなつていてる。向こうもこんなに長引くとは予想外のようだ。

でも一、二人のヘイロネア兵に城壁にのぼられると、私たちの兵士四、五人でからないと太刀打ちできない。

戦った兵からの報告によると、よくわからないが翻弄されっぱなしで多勢で一気にかからないと敵わなかつたほどらしい。しかも剣の形が変わっていたとも言つていた。細いのに折れないと。敵から取り上げたその剣を持つてくるように頼んでおいた。もうそろそろ来ることねだろう。

いつ城壁を越されるかと冷や冷やしながらも、ヘイロネア兵が城壁にたどり着いて私たちの兵と戦つ様子を見ると、どこかで見たことがある動きなのだ。

「あの立ち方どこかで……いやまさか、そんなはずは……ありえない」

「失礼しますユーロ様！！！敵兵から没収した剣をお持ちいたしました！…どうぞ。」

「ありがとう。」

兵士にお礼を言つて、布に巻かれた剣を見てみると言葉を失つた。

なぜありえないと言い切れるだろうか。

私がここにいるように、同じく飛ばされた人間がいてもおかしくないといふのに。

剣は日本刀だつた。どこからどう見てもだ。恐らく、日本刀や戦争に関する知識と、武術を習得している者が私のように飛ばされてしまった。かなり日本人の可能性が高い。

しかも、ヘイロネアがこの戦争をしかけてきた原因の一つかもしれない。少なくともここ2、3年以内の最近にその人が飛ばされてきてヘイロネア国の中核に関わり、兵士たちを鍛えたのだろうか。その技術をこの短期間である程度ものにさせることができた。だからヘイロネアは宣戦布告もなしに徹底的につぶしにかかつってきたのだろうか。国力が五分五分だった前とは違い、今はその人がいるおかげで勝利を確信した。なによりヘイロネアは自分大好きなお国柄らしいし、野望もある。

中枢である首都をつぶしてしまえばこの国は簡単に手に入る。いや、憶測で物事を進めるのは危ない。・・・・でも私の考えが正しかつたら？

「そこの貴方！すぐにアーシャルバーと各大臣をこの部屋に呼んでください。」

「はつ……」

一礼して部屋を出していく兵士を見送り、ノート片手にこれからどう反撃に出るかを考えた。

兵糧攻めを長期間続けられたら分が悪い。しかも向こうも長期戦がこちらにとつて不利なことがわかつてるので、五万近くの大軍を率いてるのに一気にかかつてこず、五千ほどの兵をけしかけてきてちょこちょこと損失をあたえてくる。

恐らく、チームに分けて順番に攻撃することによって兵士を疲れさせないで、なお且つこちらの気を散らすつもりなのだわ。

急に扉がひらくと、ゾロゾロ連れだっておえらこさんたちがやってきた。

「本当はこちから伺わなければなりませんが、今回はご勘弁を。実はヘイロネアに使者を遣わそと考へています。いかがお思いになられますか？」

「なんですよ！？それは危険だ。使者は生きて帰ってはこれぬだろう。」

国土大臣が反対の意見を唱える。だが、それくらい私もわかつている。

「和議という可能性にもかけたいのです。・・・かなり低い確率でしじうが。ヘイロネアに派遣することが無理なら、ヘイロネア軍の一番偉い方と話ができるばいいです。」

アーシャルバーと大臣たちはひとしきり話し合つて、私に向つて訪ねてきた。

「可能性があるならそれにもかけたいと？」

「はい。受け入れられればそれはそれで終わりですが、この和議が受け入れられない場合のことももちろん考えてあります。」

「受け入れられなかつた場合の作戦とは？」

「ゲリラ戦を決行するつもりです。具体的には、敵の補給路や通信網の遮断、妨害などを行い敵を孤立させるつもりです。そのためには、地下トンネルを男以外の女子供にも手伝つてもらつていては知っていますよね。向こうも長期戦のつもりでしょうが、こちらもそのつもりです。きっと予想以上の長期戦になつた場合、応援を呼ぶはずです。それをゲリラ戦によつて阻止します。もし食糧支援などの場合はこちらがそれを頂ければよろしいです。兵たちから不満でも出れば撤退するしかないでしょ。」

この世界の戦争は、大体一日二日で終わる。長期戦といつても数週間分の生活用品しか持つてきていないと情報だ。こちらは三か月は耐えるほどの食料等を持っている。しかも城下町の外に広がつていた畑は、こちらにも痛手だが焼き払つた。

やはり生きているものは空腹には耐えれないだらう。

奇襲も考えていたのに、交替で襲つてくる兵士のせいできちら側にはそれを行う元気もなし、決行する隙もない。きっと交替で休ませずに襲つてくるだらう。

とにかくトンネルが出来ない限り、こちらは防御に回り続けるしかない。

幸いにも、向こうにはトンネルを掘るという考へはないようだ。

「・・・何人か集めよう。その代り立候補制ということだ。立候補するものがいなければこの話は無しだ。良いな、ゴー！」

「御意。アーシャルバー。」

「これは希望制です。やつたくなればやらなくて結構です。ヘイロネア軍に和議の申し出をするために、使者を遣わすつもりです。」

私の一言にて、この部屋に呼ばれた男たちの周りの空氣が凍つた。

「…………誰か死ぬ覚悟で行つてくれるものはないだろ？」「いやらもなるべくその方のために、安全確保をするつもりです。」

しばらくみんなが黙つたままでいると、一人の鳥頭が私の前に進み出した。

「その役目、私にやらせてはいただけませんでしょ？他の者には家族がありますが、私は三年ほど前に母を亡くしてから天涯孤独でござります。恋人もおりません。友人たちはみな心配してくれるでしょうが、他の者たちに比べると死ねない理由が少ないので、それによこの國を守るために死ぬのであれば本望です。」

「ほんとによいのですか？後悔していませんか？死ぬかもしれないのですよ？」

「一度決めたことを取り下げるつもりはありません。」

私の目をみてしつかりとした口調で答えた彼にゆつくつとうなづく。

「あなたの名前は？」

「『ゴルト』でござります。」

「アーシャルバー代理の命により、コルトをヘイロニア軍への使者に任命する。・・・必ず生きて帰れるように努力します。」

はじめはみんなに聞こえるように大声で、後半はコルトにだけ聞こえるほどの大きさで宣言をした。

すぐさまコルトに準備に移るように命じる。

そして何本かの矢を、攻撃が止まっているわずかな間に敵の本陣に矢文として放つた。

「よし、受け取ったのね。」

「はい。最初は攻撃と勘違いしたようですが、矢に付けられた紙に気づきそれを上官と思われるものにすぐさま見せにきました。」

矢文に書いた内容は要約するといふだ。

我々には戦意がない。そちらの国と良い関係を築いていきたいのだ。そのため、そちらに一人使者を遣わす。和議についてその使者と話をしてほしい。

和議についての話し合いをそちらが受け入れようが受け入れまいが、使者が帰つてこない、殺してから我々に突き返す、またはけがをして戻ってきたとなれば、貴国の軍を無事で返すつもりはない。

そちらは宣戦布告もなしにこの戦を開始し、新たな戦術等を取得したつもりで我が国を滅ぼしにかかりたようだが、貴国にその知識提供者がいるように我が国にもそのような人物がいるというのを伝えておく。それを一番実感しているのは貴国であろう。くれぐれもご英断を誤らぬように。

「コルト・・・どうか無事に良い結果を持ち帰つてきて。  
祈るよつい田を開じた。」

## 第五話 使者（後書き）

一つ戦争ものは、頭悪いので戦略とか考えられません。

Orz

## 第六話 使者の帰還（前書き）

毎度お馴染み急展開です。

## 第六話 使者の帰還

矢文を放つてから、攻撃はピタリとやんだ。

その間に城壁の修理などの被害への対応に追われる。もちろんその間も兵を配置して気を配らせた。

首都の人口は二十万ほど。そのなかで兵士として活動できる年齢の男は三、四万いくかいかないか。

もし攻め込まれても、第一の城壁がある城へかくまつてやれるのもわずかしかいない。

だから、城下町を守る第一の城壁をどうしても死守しなければならないのだ。

「使者の準備が整いました。」

「……わかりました。矢を放つて下さい。」

「ハッ！」

第一の矢文を放つように兵士に命じる。もしもの時のために十本ほど同じ内容の紙をつけた矢を放たせた。

内容は簡素に、今からそちらに使者をよこす。くれぐれも余計な真似はせぬように。

と、だけ書いたもの。

しばらくすると別の兵士から、ヘイロニア軍が手紙を受け取つたといつ皿の伝言がきた。

「城門は開けずに、……『縄梯子』ってなんて言うのかしら……」

縄で作った梯子で、城壁から使者を降ろしてやりなさい。」

それからが長かった。

六時間たつても彼は戻ってこない。イライラと部屋の中を動き回る。私の周りにいるおえらいさんたちも落ち着かないようでそわそわしつばなしだ。

昨日から多人数が休まず掘り続けているトンネルは目的の山まではまだまだ。このトンネルは使いたくないが、和議が受け入れられなかつた時のために何があつても掘り続ける必要がある。

コルトは殺されてしまったのではないか。いや、それなら攻撃をしてきてもおかしくない。それとも何か裏があるのだろうか。

「矢文を放つわ。用意して。」

近くの兵士と文官に矢と手紙の用意をさせる。

「はいー何と書き記しましょうか?」

「・・・・・・使者の無事を確認させよ。それからいつまで待たせるつもりだ。もしこの和議が受け入れられなかつた時には、こちらにも考へがある。再度通告する。我が国にも、貴国にいるような人物がいる。貴国も大きな犠牲をしなければ、そうやすやすとは落とせぬと思え。ご英断のほどを。・・・と書いて。・・・できた?」

「はいー」

「第一の門へ行つて放つてきて。」

城下町を守る城壁へ行かせて、報告を待つ。

「ヘイロネア軍受け取りました！――」

「御苦労。」

兵士にねぎらいの言葉をかけて、この国の参謀的役割の人たちと話し合ひ。

「これくらいの脅しをしないとやはり引かないでしょうか？」

「そうですね。軍事の中核を担える、優秀な人物がいると匂わせるのは良い脅しでしょう。それは、しかけてきたヘイロネアが一番わかつているかと。七日ほどかけてじわじわ弱らせて、余裕で乗っ取るつもりが、思わぬ反撃に出られてかなり驚いていると思いますよ。少なくとも私なら驚きます。」

「ですが、あまりこちらにどのようないい人物がいるかという情報は知られたくなかつたのも事実ですな。今後のことを考えると、という話ですが。」

「今は国の存亡がかかっております。今までの戦とは違うのです。未来のことと心配するよりも、今のこの状況を抜け出すことが第一です。・・・アーシャルバー代理のことについて、今後悩めるのならそれは幸いです。なにせ我が国が存続できているということですから。」

一応脅しのために私の存在をヘイロネアに伝えているが、本当は大したことのない小娘だ。兎に角、私みたいな小娘でも、あなたの国にいるような（いると仮定して）未知の知識を持つた優秀な人物がうちの国にもいるんだよ～ということを、脅しでもはつたりでも構わないから知らしめておくのが大事なのだ。

「失礼します！…使者殿の無事が先ほど確認できました！…テントの中から出てきて、大きく手を振つてまたテントに戻つたのです。」

部屋に飛び込んできた兵士の言葉に、皆安堵して溜息を吐いたり、隣の者と話しだしたりして少し騒がしくなった。

「皆の者！…使者の無事が確認されたところで、そろそろ私たちも遅い夕食を取らないか？もうすでに夢の刻寄りの星の刻を過ぎてしまつたからな。それに使者が向こうにいる間は襲つてはこぬだらうし、まだ取引の途中のようだ。」

アーシャルバーが大部屋の人たちにもちかける。気を抜くわけではないが、みんなでご飯を食べようといつ。それには多くの者が賛同した。星の刻は大体八時から十時ごろのことだ。夢の刻とは十時から十一時のこと。夢の刻寄りの星の刻とは大体九時半過ぎということになつていて。

十一時から一時に当てはまる光の刻に昼食を食べた後は何も口にしていない。そのことを思い出すと急激にお腹がすいてきた。流石に何か食べないとヤバい。気を張つていてご飯のことを忘れていた。支給された夕飯は、パンつぽい平たくて丸っこいものと見た目がグロイ爬虫類に似た生き物を焼いたもの、それからコーンとかぼちゃを足して二で割つたようなポタージュに似たスープ。

私がからしたら十分だつたけど、ここのはライさんからしたら粗食だ。

危機的状況下で、食べ物をより大切に扱う必要があるからだ。もちろん誰も文句など言わない。

やのことを懸念する。政治家たちはホントに国底思いただ。

翌朝、日覚めてからすぐに会議が始まった。議題は武器の補充についてだ。

敵が攻めてこない間はもちろんチャンスとして利用する。」の先のことを考える期間があるので。

使者を出したことで『攻められない時間』というものを手に入れられた。

「それでは会議を始めるとしよう。議題は武器の補充についてだ。・  
・・といつても、ゴーパよ。お主はもつ武器は補充できたと申して  
おつたが？」

「はい。ヘイロネア軍が私たちにくれたではないですか。火矢以外の矢が放たれそうな場合は、木とスルロー（藁に似た植物）をぶ厚く編んだ盾で身を守れと命令しました。そしてその使い終わつた盾の矢は抜いて持つてくるようにとも申しつけました。それにヘイロニア軍が引き揚げたわずかな時間内に、両国の死体を回収もさせました。敵も味方も死体は丁寧に扱わせておりまし、彼らの武器や防具なども今後のことも考え使わせております。・・・・・

残念ながら、捕虜としてとらえることができたヘイロネア兵がいないので、あちらの情報を手に入れることはできていません。捕虜に

するため生かしておこうと思えるほど弱くなく、命の危険を我が軍の兵が感じているからでしょうね。隣のイルアス国へ派遣した使者も、今日で派遣して四日目です。あと三日ほど耐えれば、イルアスからの援軍または支援物資がくるやもしぬません。それに、武器を作るために、マフダ（鉄に似たもの）で作られた日用品などを寄付してもらひのはいかがでしょうか？」

矢の仕入れ方は・・・三国志をある程度知っている人ならわかつただろう。

マフダの寄付は、WW2の戦中に日本が国民から鍋などの鉄製品を差し出させたことから思いついた。

国民には悪いが、家にある鍋やフライパンその他もろもろのマフダ日用品を一つ提出してもらひことにする。

「つむ。なかなかの方法ですね。私はそんなこと思いつきもしなかつたよ。ねえ、みなさん？」

宰相が同意を求めるが、大臣たち一同は何度か首を縦に振る。

「では武器調達は、代理殿の言つとおりにするといふことによりじいですな。マフダは直ぐに、首都の者たちに理由を説明して提出させましよう。・・・・戦争を首都の者たちだけでこなすのは難しいですが、敵が到着する一日前に各町や村に使者を派遣したので、距離が近い町村の者たちは首都周辺に集まってきて敵軍を包囲しています。心強いことです。まつ、今は和議の最中ですし手出しませんがね。」

「宰相、気を抜くのはすべてが終わってからですよ。」

「わかつてますよ、代理殿。戦は生き物つてね。」

「貴様……使者が戻つてまいりました……」

興奮しながら兵士が部屋に飛び込んでくる。戦争が始まつて六日、コルトをヘイロネア軍に派遣して三日がたつたころだった。

「……すぐこの部屋に通じて……」

しばらくすると、少しづつれた顔をしたコルトが戻ってきた。

「ただいま戻りました。」

「……無事で何よりです。ほんとに無事に戻つてくれて有難う、コルト。」

私に続いて大臣たちがコルトへねぎらいの言葉をかける。

「……その言葉だけで十分でござります。私のことなど心配して下さるなんて……」

コルトは感動したのか、涙ぐみながらそう言った。

「疲れてこるとこりすまないが、結果報告を頼みたいのだが。」

「はい、アーシャルバー。」

コルトの報告によると、ヘイロネア軍の一指揮官である自分一人では決められない。そのため、ヘイロネアへこの和議の申し出について知らせるために、軍の何人かをヘイロネアへ向かわせたい。との要求をしているらしい。それが認められないのなら和議の話はなかつたこととすると言つて聞かないのだ。

「なにを馬鹿なことを……！ 誰がそのような見え透いた嘘を信じる事でも？ 思つてはいるより落とすことができず、首都の周りに召集された我が国の兵士たちがいるのを知つてはいるから、この和議の案を利用して援軍を呼ぶつもりだ！！！ アーシャルバー、このような要求を受け入れてはいけません。」

「……將軍の言つとおりやもしかれんの。他の者、何か意見はあるか？」

みんな同じことを思つたのか、誰も口を開かない。

もちろん將軍の言つことも一理ある。だけど、ヘイロネアの言い分もわかる。

和議についてはもちろん國のトップへ知らさなければならない。向こうもこれほど落としにくいとはおもわなかつたし、周りもじわじわ囲まってきた。首都の私たちも囲まれているが、ヘイロネアを召集された地方の兵士たちが囲みだしている。つまりは、ヘイロネアからすればさみこまれているということだ。こちらは不利から一転有利になっていた。

「あの・・・」

「なんだ?」コ、「申してみよ。」

「今私たちは有利な状況となっています。あちらをなめてるわけでも氣を抜いてるわけでもありませんが、ヘイロネアへ送らせてみては?もしもの為に、各地からどんどん集まつてきてる兵士たちをこの国とヘイロネアをつなぐ通路の付近に忍ばせていますよね。彼らにこう司令しましょう。通るのがヘイロネア兵ならゲリラ作戦を決行。ゲリラ作戦については説明しましたよね。ちゃんと決断を聞いてきた、またはこれからこちらにきて決断を下す権利を与えられた数人が通った場合はゲリラ作戦はなしで。物資や兵士を運んできたヘイロネア側の友好国が進行してきた場合もゲリラ作戦でしつかり弱らせてもらいいましょ。」

「とのことだが皆はどう思ひ?」

アーシャルバーの問いかけに、財政担当の大臣が答える。

「私は代理殿の案を推します。このまま行かせざにいれば、包囲軍を我々は制圧できるでしょう。時が味方したのです。ですがその制圧には多くの犠牲を払うことになるでしょう。なぜなら、制圧できるかもしませんが、奴らは先ほど遠目から見てもわかるとおり我々の知らない剣の使い方をする。我が軍の兵より格段に強い。一人に五人ほど必要なんぐらいだ。きっと我々も大きな被害を出しての勝利となるう。……ですが!!!!それでは意味がありません!!!!アーシャルバーはなるべく被害を出したくないと城にこもるという決断をなされた。勝つても多くの者が傷つきます。城にこもった意味がありません。ここは一つ、和議にかけてみるのも一興かと……。ダメならダメで、最後の手段として多大なる犠牲の上での勝利を勝ち取りましょう。」

「大臣・・・」

年老いたカエルそつくりの大臣が、私の意見に賛同してくれた。

「・・・私も代理殿の意見に賛成をいたします。犠牲を出さなくて済む方にかけるのがこの国のためかと・・・。」

「私もです。」

「私も。」

次々とみんなが賛成を表明していく。將軍もしぶしぶだが賛成してくれたようだ。

「では、ユーロの案が採択ということによろしいですね。」

アーシャルバーが机を囲む面々をぐるりと見渡し再度聞く。

「それでは矢文を放たせよう。」

この矢文にも脅しの言葉を添えつける。

もし軍を連れて戻ってきた場合は、城を包囲している軍も援軍として送られてきた軍もただでは済まないと思え。こちらはもう和議をする必要などなくなつていて、アーシャルバーの『慈悲により貴国に許しがでているのだ。』こちらにも打つ手など他にもいくつも用意してあることを、何度も忠告申し上げる。

矢文を放つてからしばらくすると、五人の兵士がヘイロネアへ向けて出発したとの報告が来た。

この時点でのヴィーリングガルート国（首都クロウイグ）の被害

死者：八千三百九十二人

重傷者：五千六百三十三人

軽傷者：一万二千八百一人

行方不明者：百九十五人

建物：第一の門の城壁

農作物：首都周辺の畑、森

家畜：被害なし

## 第六話 使者の帰還（後書き）

話数がある程度のところまできたので、更新速度を落としたことがあります。

ヘタレ作者でごめんなさい（――）三因みに、

ヘイロニア軍をかこんでいる召集された兵隊さんたちへの指令は、今は伝書鳩的システムで、駆けられた空飛ぶ生き物に書簡をくへりつけて送っています。遠い距離だとしついでに、首都を少しこえたところまでなら正確に運んでくれます。

## 第七話 もつべやもの友達（前書き）

戦争の長期化で戦況が一変したようです。

## 第七話 もつべきものは友達

戦争がはじまって十日あまりたつた。ヘイロネアから返事がくるまであと四日ほど。

「イルアスへ行っていた使者が首都付近まで来たとのことです！一万五千の兵と救援物資と共にです！」

「益々我らの有利だ！！神は我々に味方したか？」

兵士からの情報に会議室が沸き立つた。考えていたより一日ほど遅れての援軍だった。

「ですが誘導するためのトンネルがまだ・・・」

「イルアスの兵にはヘイロネア軍を包囲するのを手伝つてもらえばいいので、その場で待機ということで。トンネルはあと一日一日で出来そうです。なんせ五万人近い首都の者たちが必死に休まず掘っているのです。」

会議室にいろんな案が飛び交いだす。

そんな中私は一人刀を前に考えていた。将軍たちが強いと恐怖したヘイロネア軍の剣の使い方や構えを前線近くへ見にいって驚愕した。それはひどく懐かしいものだった。

ほぼ確実に、私以外にこちらへやつてきた日本をよく知る人物がいる。

日本、剣道、この世界へ来る前にいた場所・・・・・・でも彼は屋上へは入らなかつたはず。

だけど、だけど、ホントに低い確率だけど・・・もし何か事情があつて屋上へ彼が入つたのだとしたら？可能性としてはありえる。私がここへ来たときのように、どこかへつながつている場所がいろんな所にあるのだとしたら。

・・・・・・・・・・・・・

「やめよう。下手な期待をして傷つくのは自分だわ。」

忘れたつもりでいた淡い感情がよみがえつてくる。  
なんとか自分にそう言い聞かせるが、わずかな期待は膨らんでゆくばかりだった。

「『』報告を！－！ヘイロネアから十人ほどの人がこちらへ向かっているもようあります！－！あと半日ほどでこちらへ到着するかと。」

兵士が会議室へ飛び込んでくる。

「和議の可能性が高くなつたぞ。」

「いきなり仕掛けられたこちらからしたら、ある意味くやしいですね。」

皆が好き勝手しゃべり出すと、アーシャルバーが大きくわざとらし  
い咳をして注目を自分に集めさせる。

「和議の話し合いをするにあたつて、そこに立ち会つ者を選ぼうと思つ。あちら側の人数にもよるが、両国とも二人づつで話し合おうと思つんじゃが。私の他誰が適任かのう。」

「アーシャルバー直々というのはあぶないのでは?」

「わたしが行かずに誰が行くというのだ。」

私も興味がある。ぜひ参加してみたいが、採用枠は残り一人だ。入  
れるかな?

「私としては、取引上手な宰相と参謀がよいのじゃが……どう思  
う?」

誰を残りの一人にするか選ぶために、声が次々と上がる中考える。  
確実に私が話し合いが行われる部屋に入れる方法・・・・・。

・・・・・・・・・・・・あるじゃない。

「アーシャルバー、私、ぜひに話し合いの支給を担当をしたいのです。させてくださいますよね。」

有無を言わさぬようにニッコリと微笑んできめてやる。

ここでためらいがちに伺つたりしたら、「君は今までよくやつてくれた。だが、ここからは戦争ではなく駆け引きだ。それに敵と同じ部屋に入るのだ。どんな危険なことがあるかわからない。この部屋で安全に過ごしていたのとは違う。支給は武芸に長けた男の使用人にまかせる。」とか言われて終わりだ。  
ここは引かない方が良い。

「いや、だが「よろしいですよね、アーシャルバー。」・・・・・・  
よろしい。」

「ありがとうござります。私ほど適役はありませんものね。なにせ本来の仕事は支給専門の使用人ですし、内部の事情もある程度わかつておりますから。ああ、私、少し疲れてしましましたので自室に戻つて休憩させていただきますわね。失礼。」

他の大臣たちにも何か言つ暇をぬえず、さつさとぎびすをかえして部屋を出していく。

私が出ていった部屋には、ポカーンとしたおえらいさんが残された。そこでは、代理殿はとんでもなく腹黒いのではだと、フイリシュ（この世界のタヌキのような生き物）のようだと、雇う職場を間違えてるんじゃないとか、あの笑顔は聖女の皮を被つたヴィクター（この世界の伝説上のモンスター、魔物と訳せるものの王様。すなわち魔王）だとかなんとかいう言葉が聞こえたとか聞こえなかつたとか。

部屋に戻ると同室の三人に囲まれる。

「どうゆーことよコーコー！…いきなりこの部屋に戻つてこなくなつたと思つたらアーシャルバーの権限を与えられただなんて…！城中その話題でもちきりよ。支給係の使用人がアーシャルバー代理になつてこの戦争の中核を担つてるつて。」

可愛い可愛いルーベルがシャーシャー言いながら詰め寄つてくれる。

「ルーは少し落ち着いて。…でもホントよ。私たちとでも心配してたのよ。何があつたのか話してくれる？」

ワニ顔のガルサが心配したように言つてくれる。最初見たとき怖い顔、女かわかないと思つてごめんなさい。

不思議つ子のシェイラーは何も言わずこちらを見続ける。こっちの方がよっぽど怖い。なんだかかなりご立腹のようだ。

「悪かったわ。でもとても急なことだったのよ、わかってちょうだい。まあ、ここで立ち話もなんだから座りましょ。」

私がイスに座ると、三人は一段ベッドの下のベッドに腰かけた。

「簡単に言つと、今回の戦争つて今までの戦争と違つでしょ。城壁だつて敵兵が攻めて来た時のためのものじゃなくて、いろいろな意味があつて一応作られてただけでしょ？でも今回それがとても役立つような戦争だつた。要するに、はじめて国に攻め込まれた。だから何をしていいのか上の連中は何をしていいのかわからなかつたの。」

「そこ」でなんでユーロに関係するのよ。」

「最後まで聞いて、ルー。．．．対応が遅れたから、首都の人たちだけで戦わなければならぬ。それにアーシャルバーは戦争による死をなるべ少なくしたいと考えていた。直接対決すれば、こっちが奇跡でも起こらぬ限り負けてた。だから城にこもつて敵があきらめて帰つてくれるまで対抗することにした。だけど、籠るにしても何をしていいのかわからない。そこで居合させた私が、たまたま自分の国で過去にあつた似たような戦い方とかの知識を教えたの。そしたらアーシャルバーが私の知識に頼ろうつてことで代理任命されて、色々助言したりしてたのよ。それに、一回だけ部屋にも戻つてきたのよ。（まあ、仕事中にノート取りに戻つた一瞬だけね）

「・・・危ないことなくて良かった・・・」

シェイラーがポツリとつぶやく。相変わらずその顔は無表情で何を考えてるのかつかむのに難しい。だけど心配してくれていたのはよくわかつた。

「何もしらせなくてごめん。心配かけてごめん。それから、有難う。」

「何いつてるの…私たち友達なんだから当たり前でしょ…！」

照れたように言うルーベルの言葉に、慣れないことで知らずに緊張していたのかどうと疲れがでてきて、今さら体が恐怖に震えた。頬を暖かいしづくが止まることなく伝っていく。

「…………うう…こわ、怖かったの…・・ヒック…遠くからでも…・・ヒック・・たくさんの人人が死んでいくのが…・・見えて…」

「そうね、怖かつたわね。辛かつたわね。いっぱい泣きなさい。」

嗚咽を漏らしながら話す私の言葉をきいて、ガルサが私の背中を優しくゆづくりとなさせてくれる。

シェイラーは無言で私の右手を、ルーベルが左手を握つてくれる。

「…………ありがとう。ホントにありがとう。」

私は十八年しかいなかつた向こうの世界を懐かしんでばかりで、私を思ってくれるこっちの世界の人たちをないがしろにしていたのかもしれない。彼らのホントの優しさにきづけなかつた。向こうの世界に、家族以外にこれほど私を思つてくれる人はいるだろうか。家族も悲しんでくれるだろう。だけど、それでもこれからを生きていくのだ。私のことを忘れはしないが、時間がたてばたつほど私を思う時間は少なくなる。それは私にも当てはまる。

帰ることができないなら、ここの人として彼らと生きていくつ。向こうを忘れることはできないけど、私を大切に思つてくれる人はここにもいる。

彼らと向を合ってこう。私、ここで生きてこう。

## 小話 ラグの秘密（前書き）

ひとつ忠告します。

ラグ、アホです。ラグに良いイメージを持つときたい人は飛ばしてください。

## 小話 ラグの秘密

みなさま、突然ですがこんにちは。神武宮ラグです。

この間、神殿に遊びに来た妹と一緒に私が連れてきたユーロがやつてきました。

ユーロは流れるような黒く艶やかな肩甲骨まである髪の毛先を内側に巻いた髪型をしており、健康的な白い肌をしています。顔も私の国ではとんでもなく美人だといわれるほどのつくりです。

私が助けたときも、よこしまな考えがあつたかと聞かれれば私は神官なので、女性にそのようなふうふ；愛江ひ；いひだ；dかkじごによごにょ・・・まあそれは置いといて、兎に角城で働いている者たちでユーロを知らないのは上の人たちだけだろう。（わざわざ誰それがカワイイだと美人だとかいう話を下働きの人気がしないから）

ユーロには内緒だが、城下町でもかなり評判で、ユーロが城下へ友達と連れ立つて遊びに行くとすぐに知れ渡る。内緒にしなければいけない内容とは、勝手にユーロの姿を描いた絵が売り出されていて大ヒットしているということだ。かくいう私も持つていんbdかじ。ごくふあd・・・知り合いからいただきました。いや、別に欲しかったというわけでは・・・（ホントは友達の武宮に無理やり買いに行かせた）

もう一つの秘密ですが、そんなにモテモテなら恋人の一人や二人と

お思いでしょがそーは問屋が許しませんよ————我々はファンクラブを作り、ユーロ不可侵条約を結んでいます。この二つに入らないとユーロに近づいてはいけないのです。もちろん入ればアタックもアピールもしそぎてはいけません。もし、この二つに入っていないモノがユーロに話しかけたりすると…………以上は私の口からはとてもとても…………（ガクガクブルブル）とても厳しいお仕置きが待つてます。

ユーロが誰か一人のものになるくらいなら、自分も手にいれることはできないが誰のものにもならずにいてくれた方がよろしいのです。

「ゴホンッ！——兎に角、そんなユーロが遊びに来たのです。そりゃあー神殿は色めき立っています。

色々と危険を感じた私は、場所を移動させることにしました。

知り合いの喰む酒落た食事をとれるお店で、ユーロから質問をされました。

「前から思つてたのだけど、ラグは肌の色緑よね。シェイラーからも聞いたけど、そういう人達つてほとんど食事取らなくとも大丈夫つてホント？？」

「ああ、言い忘れてましたがシェイラーとは私の妹のことです。これが困ったこでほんとしやべらないんです。兄さんお前の嫁のもうい手があるのか心配で心配で夜も寝むるよ。まあそれは置いといて……」

「さうだよ。朝の一つ星の光（太陽的役割の星）を浴びれば何故だかエネルギーが湧くんだよね。特に水を飲んで、皆が呼吸していくつて言つてこりに行くとそれが顕著なんだよね。」

「…………よ、葉緑体なの…………その肌の色の原因は葉緑体なの

か……。どうやってそんな進化の過程を経たのよ……！ 植物と動物がどうやって合体したのよ……！」

「？？？？」

「……」

一人で叫び出したユーロは何かを言つてゐるがまったくわからない。  
ユーロの国の言葉だらけ。

ユーロは興奮するところの言葉で話す。

妹は相変わらずボケつとしている。実にこの国は今日も平和だ。良いことだ。

私は朝の一つ星の光をめいっぱい浴びながらエネルギーを充電しつゝ、叫ぶユーロをここにこしながら見ていました。

めでたしめでたし。

「なに笑ってるのーーーー！」

「ハハハハハ何でもないよハハハハハ今日も平和だなあーって思つただけさハハハハハ」

「なんかむかつく・・・・・・・・・・。」

「ユーロ、気にしない。お兄ちゃん、アホだから・・・・・・。」

小話 ラグの秘密（後書き）

シェイラー……ラグが反面教師だったのね。

## 第八話 和議（前書き）

めちゃくちゃ短いです。

## 第八話 和議

数日前まできていた使用人の服にそでを通す。なんだかとっても久しぶりに着た気分だ。つい何日か礼服を着てたから奇妙な感じがする。

ヘイロネアからの使者が到着して、一日目の朝。長旅で疲れているだろうということゆつくりと休んでもらってから話し合いをするとのことだ。

話によると、八人が使者と共に着たそうで、一人が十四、五歳の少女だという以外はごつい男ばかりだという。しかもかなり大柄な態度のようで、こちらの食べ物を一切食べようとせず、自分たちが連れてきた使用人以外は部屋にも入れないという。ここまで徹底的だと逆にすごいわ、ヘイロネア。

今日はその中の三人と話合う日だ。私は飲み物を用意したりするために早めに部屋に入つて待機する。

まあ、用意したってヘイロネアの人たちは飲んだりしないのだろうけど。

用意が終わつてしまはらくしてアーシャルバーと宰相、参謀の一人が入ってきた。

「・・・本当にお前といつ娘は・・・とんでもないの。敵と向かい合ひのだから危険じやといふのに。」

アーシャルバーはやんちゃすきの孫を持つた爺さんのよつて溜息を吐く。

「お褒めにあずかり光栄です。何かあつたら私の知識をお貸しいたします。」

「ほめどりんーーー！」

「ハハハハ、ホントに肝の据わった女性ですね。」

「笑い」とではないわい、宰相。私は心配して居るのじや。」

そんなやり取りをしながら椅子に座る二人。話しあいの時間まで、あと十分。

「ヘイロニア国の眞様到着いたしましたーーー！」

扉の前から兵士の声が聞こえた。

談笑していた三人が、顔をキッと引き締め立ち上がる。

私は、その三人の後ろの壁際に立つて両手を前で組んで少し俯く。

「お通ししておしあげる。」

「ハツ！！」

扉が開かれゆっくりとした足取りの靴音が複数聞こえてくる。  
どんな顔なのが気になつて、うつ向かせていた顔を少しあげて見て  
みる。

言葉を失つた。

「嘘・・・・・・。」

ぽつりと小さな声でつぶやいた声は静かな部屋では、思いのほか響  
いたようだ。

扉の一番前にいた人物と目が合つ。その瞳が大きく見開かれた。

「・・・・・高田」

「武藤君・・・・・」

## 第八話 和議（後書き）

皆さんわかつてましたよね。  
こんなにわかりやすいことをもつたといつけて長く書いてすみません。

第九話（武藤サイド） 愛しこのこ憎こ憎（前書き）

武藤君サイドです。

## 第九話（武藤サイド） 愛しいのに憎い君

俺には好きな女<sup>ひと</sup>がいる。

立てば芍薬座れば牡丹 歩く姿は百合の花

彼女のためにあるような言葉。

背中へ流れる艶やかな黒髪。白いのに不健康な感じがまつたくしない肌。パツチリというわけではないが、線が引かれたような一重で切れ長の目。色っぽいという表現が当てはまる。柳の葉のように緩やかな眉。

低すぎず高すぎず、スッと筋の通った小ぶりの鼻におちょぼ口に近いサイズの口。

それらが卵型の顔にバランスよくならんでいる。

どこか、自分の周りにいる女子高生とは違った不思議な雰囲気。いつも掴みどころのない笑顔を浮かべている。

近づきたいのに近づけない。

彼女は別次元の人間。

俺には手の届かない高嶺の花。それが彼女。

「おい、武藤。クラス今年も一緒にだなーー！」

「ああ。」

友人の山口が話しかけてくる。結局三年間こいつとは一緒にクラスだったな。

「まじかよーーーよっしゃーーーむとーーーー今年は受験だが、我々はそんな嫌なことを忘れさせるラッキーを手に入れた！！何かわかるかい？武藤君。」

相変わらずテンションが高くてうざいな。そのまま受験忘れて浪人しき。

「…………」

「ほら、クラス表よく見てみろ。高田優子って書いてあるだろ？なつ？」

「だから？」

「…………おま……ちよ……えつ？高田優子だぞ？わかるか？だ・か・だ・ゆ・う・」。あの高田優子が同じクラスだぞ。知つてるよな。」

「名前はしつてる。だから？」

驚愕して慌て出した山口を横へ引っ張つてゆく。

後ろにも表を見たいやつがいるのに、俺らがずっと前にいた邪魔になる。

「お前……ついてるのか?」

「…………」

何も言わずに殴つておいた。

「……せうだよな。おまえが実は女です、なんすことになつたら俺女の子信じられなくなる。」

何しみじみ呟いてんだ。似あわねえよ。そのままゲイかバイになればいい。いや、そうしたら俺もこいつの性的対象になるのか。なら、一生モテない女好きでいろ。

「名前は知つてゐることは、顔とかは見たことないんだ?」

「ああ。」

「まあ今までクラスも離れてたし、お前そういうのとか疎いから知らなくてもしゃーないか。名前知つてただけでも上出来だな。」

なんなんだ。この上から田線……。

「…………」

「兎に角、見てみたらわかるよ。なんでこんなに有名なのかな。ちなみに俺ファンクラブ会員? 〇〇五七。一桁とか、かなり上位なんだ

ぜ～いいだろ。オフィシャルファンクラブにしたいんだけどさ、なかなか言い出したくないんだよコレが。」

後ろで何か「ひやひや」とつむかにやつをほりて、自分の新しいクラスへ向かう。

新しい教室に入ると、もうほとんどの奴が集まっていた。流石に三年目なだけあって、かなりの奴らが知り合いみたいだ。一年の最初の時とは違つてグループになるのも早い。

だから友達作りにがつつくことなく皆思い思いの行動をしている。

俺も名前の座席表を確かめて、自分の席へ移動する。廊下側の後ろから三番目。まあ、なかなかいい席だ。山口は隣の列で、教卓の真ん前の前から一番目。アホにはちょうどいい似合いの席だ。せいぜい先生に見張られとけ。

「むとーーー！俺の席最悪なんだけど。お前はなかなか立地条件いい席だな。」

「ああ。」

俺のところによつてきた山口は、そわそわと落ち着きなくあたりを見回している。

・・・・・上手く隠してゐようつたがバレバレだ。まずキヨジるな。

「あつ！いたず、あの方が我らが麗しの優子姫だ。」

山口の目線を辿ると、あいつが指し示している人間が誰だかすぐにわかつた。

兎に角、周りとは違う。顔の美貌だけはない。見目が良い奴なら掃いて捨てるほどいるだろう。だけど纏う空氣からしてその辺にいる

ような奴じゃない。カリスマ性というやつだろうか。とても惹られる。ひれ伏したくなる支配者のそれと似ている。

上に立つべきために生まれてきた人間というものを初めて見た気がした。

彼女は前の席の女と話を聞きつつ本を読んでいた。

「はあ～、我らが女神は今日もお美しい。なつ？武藤。・・・おい、武藤？武藤！聞いてるか？」

俺は山口の話なんか耳に入つていなかつた。雷に打たれたような衝撃に打たれ、彼女にただとらわれていた。

今まで体験したことがない衝撃だつたため、自分のこの気持ちが何なのか気づくのに時間がかかつた。

気付いたところで、俺にはどうしようもないのだが。

俺は一目惚れというものをしたらしい。

まさか自分が体験するとは思わなかつた。

科学的には、一目惚れというのは自分の持つていらない遺伝子や免疫なんかを子孫に伝えたいがためのものらしい。詳しいことは俺にもよくわからないが、もしそうなら彼女は他の人間とは違つたものを持っているのは確かだから、大層本能的面でも惚れられるのだろう。理性的な面でも彼女は最高に良い女の子のようだ。

俺みたいに女子供に怖がられるような男には彼女を得るのは到底無理な話だ。

馬鹿みたいに遠くから見つめるだけの一員になるだけで満足しなければならない。

そのくせ、告白する勇気も持ち合わせてないくせに、彼女に他の男が近づくとそいつを殺したくなる。

そんな自分に自己嫌悪して昔からやっていた剣道で憂きを晴らすよう相手を叩きのめす。

乙女なわけじゃないが、ホントにこんな気持ちにさせる彼女が憎くなるほどに気持ちが日々募ってゆく。

身勝手な独りよがり。

愛と憎しみは表裏一体。可愛さ余つて憎さ重んじ  
まさか自分が体験するなんて。

第九話（武藤サイド） 愛しいのに憎い君（後書き）

一人とも気づいてないだけでお互いべた惚れです。

## 第十話（武藤サイド）色々な君を知りたい（前書き）

すみません。優子の漢字が違つたのでなおすついでに、文章やサブタイトルをいじつてかえたんですが、間違えて十一話としてのせてしまいました。十話のつもりです。でも、十一話もなるべく早く載せるので気にしないでくれたらと・・・

## 第十話（武藤サイド）色々な君を知りたい

ただ見ているだけだった存在の彼女と急速に接近したのは七月だった。

俺の通う貧弱な公立高校は、まだクーラーをつけるのを何とか引き延ばしている。死ぬほど臭い防具をつけながらの剣道は、暑さとの勝負でもあった。

なるべく涼しくしようと、重い鉄の扉をすべて開け放しにする。その時、遠くの方からたぐさん人の楽器の音が聞こえてくる。

吹奏楽部か・・・・・。

少し外の様子を見てみると、一階の音楽室付近の廊下の窓が全て開けられていて、そこから女子生徒が楽器を吹いているのが見える。そこには彼女がいた。

「ランペッタ・・・・。

肺活量のかなりかかる楽器を吹いてるんだな。木管系のフルートとかクラリネットの雰囲気だと想つてたけど。でも、彼女の性格にはあつてゐるのかもしれない。

見つめ続けてると色々と氣づくことがある。周りは理想の高田優子を作り出し、その『高田優子』というフィルターを通してみているようだ。だから、自分のイメージと違ふことがあると見ないふりをしたり、勝手に幻滅したりする。理想の『高田優子』を高田優子にかぶせられる彼女はどういう心境なのだろうか。

彼女は意外と大食いだ。弁当のでかさとボリュームは男子並み。食わず嫌いで、肉ならなんでも好きらしい。野菜と魚という和食しか食べなさそうな顔なのに・・・。

砂糖とミルクたっぷりのロイヤルミルクティーが大好きで、お菓子もよく食べている。というよりか、気がついたら何か食べている状態だ。

この間は、こっそり早弁してるのを見た。ホントに見た目や雰囲気と行動や思考回路が全く合致しないタイプだ。なんというか、周りに流されず自分の思うように行動している。集団行動大好きな周りの奴らとは違い、集団行動もするけど一人でいてもなんら気にせず「皆」という時間も好きだけど、一人の時間も必要」そんなことを指摘してきた友達に言っていた。サバサバと言つかひょうひょうしている。

そんなギャップも可愛いと思う俺は重傷だ。

「おい！…武藤、ボケつとするな！…」

「・・・すいません。」

部活中にボケつとしていたせいが、顧問の教師に怒鳴られた。こんなこと今までなかつたのに。

いつものように部活で汗を流す。

時折、隣の校舎から吹奏楽部の練習している音が聞こえてくる。そんな時、無意識に彼女を探してしまった自分がいる。

いた。

自意識過剰なのか、彼女がこちらを向いているような気がする。むずがゆい感じがしてなかなか集中できない。だけどもし、本当にわずかな確率だが、彼女が俺のことを見ているのならば、やはり男心はかつこを付けたがる。

彼女にみつともない姿は見せられない。いいところを見せたいという気持ちがムクムクと湧いてくる。

だが、心なしか他の部員も気合が入っているように見える。  
・・・・・俺が思うようにこここつらも思つてゐるのか。  
みつともないな。勝手に盛り上がり勝手に勘違ひして・・・。早く練習に集中しよう。

あまりの暑さに倒れる生徒がいるかもしないと顧問が言い出し、途中休憩となつた。

吹奏楽部の練習も終わっているのか休憩のようだ。音が聞こえない。

裏にある水道の水を首筋にあてて体温を下げるといふと、わずかに入

の気配がした。

誰だ？こんなとこ剣道部しか使わないし、先に他の奴らは体温下げたはずで俺が一番最後だぞ。

「何してるの？」

突然すぎてかたまつてしまつた。

「ああ、高田か。」

何とか平静を保とうと、こつそり深呼吸を繰り返す。  
俺は普通に喋れただろうか。

第十話（武藤サイド）色々な君を知りたい（後書き）

「まだ学校クーラーついてないだろ。だから防具着てると熱がこもるんだ。倒れないためにこまめに体温下げる必要があるんだけど、そのために首に水かけてんだ。高田は？」

• • • • • • •

自分としては普通にできたつもりだったが、何故か彼女はしばらくフリーズしている。  
もしかして俺はなにかとんでもない失敗をしてしまつただろうか。  
急に不安な気持ちになつていく。

高田彌二郎

「ああ、ごめん。武藤君がこんなにしゃべつての初めてみたもんだから。」

俺はそんなにしゃべらない男だと思われていたのか。 というよりか  
事実そうだ。

彼女の前だから、知らずに気持ちが高揚して普段よりしゃべりすぎたんだろうか。兎に角恥ずかしい。

う。顔が急激に熱くなつていいくのを感じる。きっと赤くなつていいるだろ

こんなに恥ずかしい思いをしたのは小学四年生の時の剣道の試合で、事前にトイレに行かなかつたせいで漏らしかけて変な動きで戦つた時以来だ。あの時は早く終わらせたくて変な動きだったが、驚異的なスピードで決着をつけた。勿論勝つた。

余計なことも思い出して、思わず顔をおさえながらしゃがみこんでしまつた。

「……武藤君！大丈夫？どうしたの？」

しゃがみこんだ俺を心配してか、高田が駆け寄つてくる。

「いや、いい。大丈夫だから心配するな。」

なんとか彼女と話すチャンスを得よとい、自然になるよひに自分の隣をすすめる。

「座れよ。中腰疲れるだろ。」

田で自分の隣を指示する武藤君の言葉に従い、そろそろと腰をあげる。高田の気配に自分の心臓が激しく脈打つを感じる。どんなことを話したらいいのか迷つていて、彼女から話しかけてくれた。

「私は部活の休憩中。外で暇つぶしてたら武藤君が水かぶつてのがみえたから……。」

「高田は吹奏楽だったよな。トランペットだろ。」

「……よく知ってるね。」

そりやよく知ってるよ。ずっと高田ばかり見ていたんだから。でもこんなこと言えるわけねぇーよ。死んでも言えない。

「あ、ああ。まあな。ほら、あの、最近よく廊下で練習してるだろ。それでだよ。」

「確かに。ここからああそこ見えるもんね。私の所からもこっちよく見えたよ。私、武道とかよくわからないけど、武藤君がすっげく強いのは遠田からでもわかったよ。」

「あ、有難う。俺も、ここまでお前の吹いてる音楽聞いえてきたけどさ、その……上手こと思つよ。俺みたいな素人がいうのもあれだけどさ。」

「クスッ、何この褒めあい。なんか恥ずかしいよ。フフッ。」

俺のことを少しでも彼女が知っていたといつのがとてつもなく嬉しかった。

そのあとは、お互いの部活の後輩が探しに来るまで話し込んだ。信じられないくらい落ち着いた、安心できる空氣の中での会話は、さらに俺を彼女に夢中にさせた。

楽しい時間はすぐに過ぎ去ってしまう。

この機会を逃したら一度と彼女と関われないと思い、背を向け歩き出す彼女を呼び止める。

「高田……。」

「？・・何？」

呼び止めたはいいが、なんと言つていいのか分からぬ。あたふたしながら言い訳を並べる。

「あ～あの、さ。お前さえよければその、なんだ、これから部活の休み時間いろいろ話さないか？あつ、嫌だったら別に全然かまわないんだ。ただいろいろ相談していければ凄くいいんじゃないかと思つて」「いいよ。」そうだよな。嫌だよな・・・つて、「え？」

「だから、いいよつて。時間もあるし。・・・私も話たいし。」

「ホントにー？」

「ホントに。こんなことなんかで嘘いわぬいよ。」

こんな誘い、絶対に断られると思っていたのに意外な返事にまだ実感できず、しばらくは夢かと思っていた。

少しは好意的に見てもらえると思つてもいいんだろうか。体格と顔つきのせいで、昔から女子供からは怖がられてたというか一歩引かれていたから、彼女の返事がとても意外だった。

あの日から一人でほぼ毎日決まった時間に道場裏に集まって2、30分話すようになった。

その間、俺は柄にもなくにやけたり、声をたてて笑つた。こんな姿、周りが見たらびっくりするだろ?」

それ以外では話さなかつたが、田があつたりすると自然と頬の筋肉が持ち上がり笑いかけていた。

二人だけの時間が俺にとつて貴重な時間となつた。

最近、ある女子生徒とよく目があう。すぐに逸らされてしまつから俺の勘違いかと思つたが、どうも回数が多くなる。

目が合うと恥ずかしそうにすぐ逸らすが、ちらちらといつを窺つてくる。

でもそのやり方がわざとらしいといふが、手慣れていて嘘くさいのだ。

白い肌に、茶色い髪のなんかふわふわした女だ。たぶん後輩だろう。男がちやほやするタイプだ。

彼女の視線の意味はなんとなくだが察しはじめていた。

## 第十一話（武藤サイド）視線（後書き）

おひさしぶりです。

私は無事大学合格することができました。その前後の準備でかなり更新遅れちゃったんですけど、まだ見てくれてる人がいたらお待たせしてすみませんでしたm(\_ \_)m

これからも待たせる可能性大の作者ですが時々生存確認してくだければ有り難いです。

第十一話（御懲サム）恒風亭（福柳也）

短いです。

## 第十一話（武藤サイド）面倒事

「あのー武藤先輩。今時間とれますか？」

部活に行こうとする後ろから知らない声が名前を呼ぶ。

「……少しならとれる。で、それが何？」

「いえ、あの・・・」では少し言ひにくことなんで、場所を移しませんか？すぐすみますんで。」

・・・・・清純さをよみおつた、そのわざとらしさ媚をうつた態度。誘いをかける吐きそつになる甘ったるい声。自分の思い通りになると信じて疑わない余裕をチラチラと見せる瞳。全てが癪に障る。  
わざと終わらわつ。

「わかった。」

彼女についていくと、山口が高校三年間の「ひたすら一度はそこにいるよ  
ばれしたい」と言っていた西階段についた。  
人通りの少ないところは有名かつ定番の告白スポットらしい。

「突然すいません。…………あの、私、武藤先輩が好きです！私と付き合つてくれませんか！！」

少しためらつた後、吐きだすように言つ彼女の声をどこか冷めた気持で聞きながら、これが高田だつたらなあとあり得ない想像をめぐらす。

「…………」「めん。」

「な、なんですか！！！私じゃダメですか！先輩のタイプの女の子になります！」自分に相当の自信があるのかなおも食い下がらない彼女に対してイライラがたまる。自分が思っていた結果と違うことを受け入れられないようだ。

「……好きな……好きなこがいるんだ。だから君の気持には応えられない。」

「……それって……誰なのか教えてもらえないのか。」

「……それは……」

ガサツ……タツタツタツタツタ……

「……！」

「チツ、誰かに聞かれたな。俺の好きな相手だが、誰にも言いつもりはない。」

イライラする。この子と付き合わないにしても、今の奴が根も葉もない噂を流したりしたら、ただでさえ高田と付き合える可能性の低

い俺なのに高田に余計な誤解をあたえてしまつ。

本人へわざわざ付き合つてないと言いに行くのもおかしいし。

「まつ、待つてください……」

呼びとめる彼女の声を後ろに残し、足音から逃げた奴が行つたと思われる方へと走り出す。

廊下を走りぬけると、足音は東階段を上つていく。足音は聞こえるが階段を挟んでいるので姿は見えない。だが兎に角捕まえて、口封じをしなければれる可能性が高いだろう。幸い、俺の見かけは怖いといわれる方なので、脅せばなんとかなるかもしれない。

恐らく屋上へ向かつているのだろう。ならば話は早いな。

あと少しというところで、ドアの開閉の音がした。俺もそれに続き、五秒もしないうちにドアへ走り寄り扉を開き飛び込む。飛び込んだ瞬間、俺の時間は少しの間止まつた。そこは屋上などでなく、俺を見て騒ぐ着飾つた何百人の人間と無駄に豪華な広間だつた。

## 第十一話（武蔵サイド）面倒事（後書き）

お久しぶりです。作者です。

長い間ほつたらかしでほんとこすみませんでした m(—) m  
いや、待つててくだるお優しい方もいなと思つ文書なんですが  
ど、続きが何とか書ける状態にもぢりつつあります。

外傷一つと一つの病気の三重苦になってしまい、寝たきりになつて  
ました。

何ヶ月も死んだような状態から体調も持ち直してきましたので「報  
告ついでにアップしました。

また倒れてかけなくなるときもあるかもしけませんがゆっくり待つ  
てくださいたらうれしいです。

皆さんも体調にお気をつけてすゞしてくださいね（^▽^）でわで  
わ長々と失礼しました。

第十二話 金の髪と青い瞳の少女（前編）

またまた短いです。

## 第十二話 金の髪と青い目の中の少女

一瞬でいろんな考えが頭の中を駆け巡る。本当に武藤君？そつくりさんじやないの？いや、でも向こうも私を見て固まってるし本物じゃない？

「なんだ？ゴー公殿のお知り合いか？」

アーシャルバーの言葉にも答えを返せない。

「いつまで見つめあつているつもり！－そこの汚らわしい化け物！カズマサを誰が見てよいと申した！」

見つめあつて動かない二人の間にわざと飛び込む影。金髪碧眼のかなかの美少女。

十五、六歳の少女とはこの子のことか。誰かに何となく似ている。でも誰だか思い出せない。

「聞いているの！？あ～、それともあれかしら、卑しい獣や魔物には我ら聖族の言葉がわからないのかしら？」

明らかに侮蔑を含んだ声と、見下したよな瞳。

「・・・申し訳ありません。お許しを。」

心を殺して頭をさげる。それよりも彼が武藤君だといふことが確定

してしまったといつショックの方が大きくて心がマヒしている。確かに彼女は彼のことをカズマサと呼んだ。武藤君の名前を忘れるはずがない。彼のフルネームは武藤一将。

「サー・シャ、やめろ。」

「だけどカズマサ、あなたを見つめてよろしこのは私だけでしてよ。そして貴方が見つめてよろしこのも私だけでしてよ。特にこのような・・・」

武藤君の胸に寄り添い甘えた声で少女が訴える。

「やめろと言つたはずだサー・シャ！――！」

彼はそんな彼女を振り払つ」とはせず声を荒げ少女を注意する。

懐かしい声にうれしいはずなのに違つた。下を向いたまま涙が出ないように、ばれないように必死に歯をくいしばり耐える。彼に会えてうれしいが、彼が名前を呼んだ少女と親しいと感じさせるやり取り。私は武藤君に下の名前で呼んでもらつたことは無いし、私も武藤君の下の名前を呼んだことはない。しかも彼は彼女を振り払わなかつた。

悔しいやら、悲しいやらというマイナスの感情がグルグル渦巻き、私はこんなに嫉妬深い女だつたのだと知る。

少女と武藤君は一体どんな関係なの？

少なくとも彼女は武藤君に淡い思いを抱いているようだ。しかも武藤君は振り払わない。

吐きそう吐きそう吐きたい気持ち悪い気持ち悪い気持ち悪い帰りたい帰りたい

「あら婚約者に対して酷い言いようです」と。クスクス・・・でも  
そんな貴方も素敵ですわ。これが終われば私たちは國で神に祝われ  
て結婚式をするんですからさつさとこんなこと終わらせましょ。あ  
ー、貴方がこの後私の旦那様になると思うと幸せですわ！」

目の前が真っ暗になつた。

## 第十二話 金の髪と青い目の中の少女（後書き）

ほんとはすぐくつけてあげて、あと数話でめでたしめでたしにしてあげるつもりでしたが、長期戦になりそうな内容に・・・でも読者の皆さんは、想像していた通りとなつた人のほうが多いかな^\_^；

**小話 私は何も持っていない（前書き）**

今回は武藤君に告白した名無しの後輩ちゃんの今までの人生の独白です。

かなり根性悪いです。

## 小話 私は何も持っていない

生まれたときから全ては私の思い通りだつた。

それなりに収入のある家庭に生まれ、しかもひとりっ子。親が高齢の時できた一人娘だったから欲しいものは何でも買ってくれたしやらせてくれた。もちろん何億とかは流石に無理だけど、私なら将来それくらい貢いでくれる人がいると思つていて。

自分で言うのもなんだが私は男好きのするタイプの顔の女の子だしそれくらい可能だろう。

鏡を見ると両親のいいとこどりの顔が映る。母親似のぱっちり一重の大きな目と長いまつ毛に小さめのふつくりしたピンクの唇に白い肌。父親から譲り受けた筋の通つた鼻にシャープな輪郭に茶色めのフワフワの髪。

ちょっとカワイイ子ぶつただけで簡単に男の子は落ちた。狙つた男子を見つめて目が合うとすぐに恥ずかしそうにそらすという行為を繰り返しただけで、数日後には告白してくれる。

小学生の時は、きにくわない女の子がいたら男の子に「私、あの子嫌だな。」って囁くだけで瞬く間にその子は男の子からは虐められ、男の子に同じことをされたくない女子や嫌われたくない女子なんかに無視される。

暇な時なんかは適当にその役をローテイションさせたりしてた。

面白かったのは私と仲が良いと勝手に思い込んで、そのゲームに積極的に参加していた取り巻き女にそれをやつたときだつた。「嘘！なんで！なんで私なの？仲良しだつたじゃない！私たち親友でしょ？」ほんとに思い込みの激しい女。

みんなの前でそう叫んだ彼女に内心爆笑する心を隠しあげたように言ひ。

「えつ！？な、何言つてるの！？わ、私と森井さんが親友！？私そんなんこと一言もいってないよ・・・森井さんはただのクラスメートだと思つてた。・・・森井さんおかしいよ・・・大丈夫？だつてクラスの子に嫌なことして笑つてるんだもん。酷いよ・・・。」

彼女に味方するものなど誰もいない。

だつて彼女に前のターゲットたちは「イジメ」られてたんだもの。ほら、その証拠に前のターゲットたちの彼女に向けられる視線は凄いものだ。

彼女は自分が今までイジメていた子たちにやられたことをかえされるようになつて、学校に来なくなつた。

なーんだ、自分がやられたらすぐへばつちやうなんだ。つまんないの。彼女が来なくなりゲームは新たなターゲットを見つけた。私はゲームをより面白くするために良いことを思いついた。

「ねえ、安田さん？最近いつも一人でいるけどどうしたの？お友達と喧嘩したの？だったら私とお昼！」はん一緒に食べよー。」

「安田さん一次の移動教室一緒に行こう！」

「ねえねえ、美穂ちゃんつて呼んでもいい？？」

「美穂！体育の二人組一緒になろー！」

「家に遊びに行つていい? 後、今度の休みついで泊まりじにおいでよ!」

嫌われ者で虐められている彼女に優しくしていはみんなから「とつても優しいね」と言われた。

もうそろそろ潮時かな。

彼女がいないのを見計らい、あからさまにため息を吐く。すると「どうしたの?」とすぐ声がかかる。みんなが見守る中私はつらそうに言つ。

「・・・・・ 実はね、私疲れちゃつたんだ。安田さん、友達いなくてかわいそだから仲良くしてたけど、あの子ずっと私にくついてる。私はみんなと仲良くしたいのに、他の子とおしゃべりしようとしたらすぐじやましたり意地悪するんだもん。やめてついてもやめてくれない。」

そこで私は声を少し詰まらせつむく。そうすると、彼女が教室に戻つて来た時には教室の雰囲気は前よりもひどくガラツと一変する。向けられる視線の意味に戸惑い、怯える彼女。みつともなくてすぐ面白かった。

また彼女も学校に来なくなつた。

小学校卒業後、近所の中学校に入学した。

小学校の好き好き同士で終りやすい恋愛と違い、中学になると、付き合つという概念が当たり前になつていた。

最初は告白してきた先輩や同級生の中で好みの人と付き合つていた。今付き合つてる人より、より好みの男が告白してたらオッケーを出した後に彼氏に別れを告げた。

もちろん揉めないように適当な理由をつけて泣いて見せた。

それにつき合う時に、誰にも付き合つてゐることをばらさないでほしいと伝えていた。ばらしたら別れるという約束もしていたし。

なんだか一人じゃ飽きた私は、他の男の子たちとも同時進行で付き合うことにした。

同じ学校だと別の男の子と仲良くしてたらすぐばれるので、他の中学や習い事で知り合った男の子たちと付き合つことにした。飽きたら捨てればいいし、予備もいつぱいいるし。

高校生になると人の男をとるのにハマつた。

恋愛相談してきた同級生を応援するふりをして、その人の情報を聞き出すとか適当なことを言いその好きな人に近づく。そして仲良くなつて私になびくようにしたりした。

三十九

勿論彼は和と良い感じはないでいて、彼女と和を失はなければ当たり前のよう私をとる。

その街で、人に告白された和田は、従事の前で泣いて見せた。良心の呵責に耐えきれずという感じに。

!

すると彼女は泣きそうな顔で、気にしないで、仕方ないよと言つ。うける。ホントはつらくて仕方ないくせに。私に仕組まれたって知らないで。

超うける。」こいつマジ面白いわ。

その他にも、中学の時から付き合っていた学校で有名な高二の「りぶら  
ぶカツブル」の男の先輩に近づいて別れさせたり。

同じ部活の子の、他校の彼氏をその子経由で知り合っておとしたり。  
同じ塾の子が先生とこっそり付き合つてることを知ると、先生に勉  
強の質問をすることから手始めに、一人っきりになるような空間を  
つくりじっくり時間をかけおとした。

他にも大学生の彼氏やらなんやら、たくさんの人のものをとった。  
人のものほどよく見えるふしきである。

だから一度私におちると興味が無くなってしまう。しばらく相手し  
てポイしちゃう。

振る理由はお友達、または先輩に対して悪くて仕方がない。こんな  
の耐えられない。『めんなさい、別れよう。と言えば簡単だ。

次に目をつけたのは同じ部活の先輩だ。ここには前から気に食わな  
かった。

だって私より人気なんだもん。

それに同級生がトイレで内緒話していた中に私と先輩を比べるもの  
がでていた。

「あの子は確かに華奢で女の子らしくて可愛いけよね。でもさ、高田  
先輩程じゃないんだよね。」

「わかるわかる……男が『この子だったたら俺でもおとせるかも、  
付き合えるかも』って思える程度なんだよね。」

「そうそう。手に届きそうな可愛さなんだよね。そういうのが一番  
もてる……でも高田先輩は女神すぎて見るのも触れるのも恐れ多い  
んだよね。高根の花すぎて自分なんか……って思っちゃうんだよ  
ね。」

今まで言われたことのない言葉に、はらわたが煮えくりかえるとは  
こういう気持ちをいうのかと思った。

それから私はあの女に苦痛を与えるため、可愛い後輩として近づく  
ことにした。

そのおかげで彼女の思い人がわかつた。

あんなタイプと付き合つたことないや。面白そう。凄く男らしいタ  
イプだ。

あいつこういうのが好きなんだ。

まず手始めに私はなるべく彼に気づいてもらおるよう、わざと高  
三の教室の廊下を通つて彼を探す。

どこかでそれ違つたら恥ずかしげに見つめてすぐそらす。  
彼とよく目が合うので恐らく彼も気づいているはずだ。

だけどなかなか告白してこない。あの女を介して、彼とお近づきになれるよう色々としたが上手いことかわされて駄目だった。  
他にも接触を持とうと待ち伏せしたりしたが、なぜか全く会うこと  
ができなかつたりした。

こんなこと初めてでイライラした。

なんで私の思い通りにならないのよ。

焦れた私は自分から初めて告白してみることにした。  
絶対の自信があった。

だけど結果は好きな子がいるから無理だといつ。  
ありえない。それはあの女?

ムカつくムカつくムカつく

その後、あの女と彼は消えてしまつた。まるで神隠しみたいに。一時凄い騒がれたけど、それももう忘れ去られてきている。良い気味。私の思い通りにならないからよ。当然の結果だわ。

「ねえ、結局彼と寄り戻したのよね？」

「うん。なんかね、あの時はマジでどうかしてた。俺ホントサイト一だよ。でも今になつて気づいた。俺本当にお前が好きだ。別れたくない。やり直そつて……」

「あんたそれで許したの！？自分の勝手な都合で振つといでなによそれ！」

「私も何度も断つたよ。もう傷つきたくないし、それつて勝手だよ。今の彼女と仲良くねつて。」

「で？」

「でもね、ずっと一田に向こうに来るの。凄く真剣な顔して、俺は許してくれるまで、お前ともう一度付き合えるまで何度も来るつていうて聞かないので。なんか私もほだされちゃつて。」

「へえ～なんか凄いことになつてるね。」

「うん。でも今、前付き合つてた時より幸せだし。ちょっと恥ずかしい言い方だけど絆が深まつたっていうか……うん、前より凄く大切してくれてるつてわかるし……」

「へいへいお幸せにね——！——ノロケはけつこうですよ——！」

「ノ、ノロケじょないよ——！」

そんな話が休み時間の後ろの席から聞こえてくる。そういうえば彼女の彼氏もおとしたんだった。

でも腹立つ。確かあの男は私が振った時はあつさり別れたくせに今彼女には必死ですがりついたんだ。

そういうば、私、別れたくないって引き留められたことあったつけ？今まで自分の別れ方がうまいんだと思つてた。  
だけどホントに別れたくなかつたらどんな理由を示されてもあつさり別れられないんじやないかしら。

私別れたくないって言われたことない。

必死になつてすがられたことなんてない。

みんな、そつかつて言つて去つて行つた。

アレ？おかしくない？私おとしたんだよね。

好きにならせたんだよね？

そういうえば小学生の時の同級生はどんな目で私みてた？

中学の時の彼氏たちはどんな目をして私見てた？  
どうこうこと？

あれから色々考えた。  
そして出た答え。

私、何でも持てる気でいたし持つていてると想っていた。  
だけど私、何も持つていなかつた。

空っぽの手のひらを見つめて思つ。  
私、何も手に入れてない。

## 第十四話 肝心なところがぬけている（前書き）

ヘイロネアの間抜け話です（：—一）  
シリアルから一変です笑

## 第十四話 肝心なところがぬけている

今、この部屋には私と武藤君しかいない。

騒ぐお姫様を連れ出して、私たちだけで話すことになつたのだ。  
一国間の和平の話よりも、彼女について知りたい。それとなんで口  
にいるのか……。

「・・・久しぶりね・・・・・武藤君。」

「・・・・・あ、ああ。久しぶりだな、高田。」

名前を呼ぶと、彼は少しうるたえた後返事をする。息もできないく  
らいシヨックをうけていた身体が、彼の声を聴いて、彼に名前を呼  
ばれただけで、こんなにも歓喜して震える。  
もう、何もかもがどうでもよくなつてしまつ。

私、もう大丈夫になつたはずなのに・・・。思つてた以上にもとの  
世界に飢えてたみたい。

出会えた人が武藤君じゃなくとも、もとの世界の人だつたらどんな  
人でも嬉しい。  
でも、武藤君だからより嬉しい。あのお姫様のことが無ければだけ  
ど。

「高田はなんでこの世界に？」

円卓の向かい合つ位置で座つて会話を始める。緊張で硬くなつた身

体が、椅子の柔らかいクッションにゆっくり沈み込んで、ビームでも落ちていくような気がして怖くなる。すがりつぶみひじ掛けをギュッと握る」。

「私は……私は……あの……放課後にね、学校の屋上に行つたの。そして気づいたら森の中です……」

「森の中! ? お前よく助かつたな。それよりなんで屋上に? 」

「私いつもたくさん食べるし友達ともお菓子交換するから、食糧は持つて……それに怖い動物とも会わなかつたし……だからギリギリなんとか生き抜いてこの国の人助けでもらえたの!! ……屋上は……うん、まあ色々あって……武藤君こそなんで口に? 」

武藤君が告白されているのを盗み聞きして、あわてて逃げて屋上に行きましたなんて絶対言えない。適当に流して、武藤君に質問を返す。

「俺も……少し事情があつて屋上に行つたんだ。そして気づいたらヘイロニア国の王宮でおこなわれてた夜会のど真ん中にいたんだ。」

「

「それがなんで使者としている? 」

「話せば長くなるだ? 」

「時間はいくらでもあるわ。」

彼も緊張しているのだろうか。フウと小さく息をついて、私がいれ

たすっかり冷めた飲み物を口にあおるよつにして飲みこんだ。  
心なしか顔色もあまりよくない。

乾いた唇を一舐めしておずおずと呼びかける。

「……武藤……君？」

すると彼はゆづくりと顔をあげ私と目をあわせる。  
呑ませた瞳は少しうがめられ、ほの暗かつた。

「俺は……俺がこの国に来た理由は和平の交渉なんかじゃない。  
……この国のトップを人質にして、内側からこの国を落すつもり  
だったんだ。」

「…………はつ？…………ええ――――――なにそれ！――やる  
にしても一か八かの賭けみたいなもんじやない！――」

だつてもし、ラッキーで武藤君たちがアーシャルバーを人質にとれ  
ても、この国の人たちがアーシャルバーを見捨てる可能性だつて大  
なのに―――そうしたら、窮地に追い込まれるのは彼らなのに――

「王を盾に取られればどつじよつもないだらつ。」

「た、確かにアーシャルバーは国のトップよ。でも、王様とか陛下  
とか皇帝とかああーもうー兎に角、そういう意味には訳せないとと思  
わ？歴史的な流れで言えば、この国にも王家にあたる一族はいたけ  
ど、今政権を握っているのは彼らじゃない。国民なのよ。アーシャ

ルバーは国民に選挙によつて選ばれた、一国民で、在任期間も決まつてゐる。しかも独裁にならないように、独裁ストッパー係である民会のような組織メンバーも投票によつてきめてゐる。確かにアーシャルバーはとつても大切だけど、王様ほど専制君主でいれないし、力があるわけじやないのよ。そんなカンジだから、國民がアーシャルバーの命と引き換えに國の安定をとる可能性だつてあるし、そうなるとあなたたちが圧倒的に不利よ？アーシャルバーは代えがきくもの。」

まくし立てるようにこいつに言つてみると、武藤君はポカンとした顔を私に向けてゐる。

私の荒い呼吸音しか聞こえない。

「…………まさか敵のそんなことも知らずにそんな暴挙にでたとか言わぬわよね？」

「…………しらなかつた…………ヘイロネアで王が人質に取られたりしたら、どんなことをしても、どんな犠牲を出しても救いださなければならぬ。…………この國は王政ではないのか。」

飽きられて言葉が出ないとほんとうことなのが。

「とりあえず、ヘイロネアがとんでもなく絶対王政だといふことはわかつたわ。」



## 第十四話 肝心なところがぬけている（後書き）

そうですね、ヘイロネアあほです。みんな自分とおんなじとおもつ  
ちゃいけないですよね。彼ら、平和ボケしちゃってるんです。

ヘイロネアはキツイ絶対王政で中央は華やかですが腐っていますので、  
重い税金や規則、領主や警備隊の横暴で国民は疲労しきっています。

感想をくれた方々、ホントにありがとうございます。

続きを読む楽しみにしてるという感想のおかげで、なんとか続けてい  
けます。

ほめてもうえたりすると、作者はかなり調子にのって喜ぶタイプで  
す。それらの言葉がとっても励みになっています。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2170j/>

---

魔王と勇者は同級生

2010年10月29日07時35分発行